

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第228集

与野市

中里前原遺跡

県営与野中里団地関係埋蔵文化財発掘調査報告

— II —

1999

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



第3号住居跡出土土器



第10号住居跡出土土器



第 8 号住居跡出土土器



中里前原遺跡透景

序

埼玉県では、「環境優先」「生活重視」「埼玉の新しいくづくり」を基本理念に、21世紀の豊かな彩の国を目指す、多彩なまちづくりを進めています。

県南地域では、首都機能を含めた高次都市機能の集積を図る一方で、過密問題を解消し、安全で質の高い都市空間を再構築するため、公的住宅の供給など、住環境の整備が行われています。また、老朽化した公的住宅については計画的に建替えるよう努めております。

このたび、県営与野中里団地の建替えが行われることになりました。県営与野中里団地改築予定地内には、2か所の埋蔵文化財が存在しておりました。その取扱いについては、関係諸機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。当事業団では、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整に基づき、埼玉県住宅都市部住宅建設課の委託を受けて、発掘調査を実施いたしました。

県営与野中里団地改築予定地のある与野市は、商業地域として発展してまいりました。今日では、埼玉新都市開発事業のほか、近隣の自治体を含めて全国的・国際的な活動の拠点となる都市づくりが進んでいます。また、彩の国さいたま芸術劇場を拠点に新しい文化を創造する一方で、県指定文化財の八王子遺跡出土須恵器などの歴史遺産にも恵まれ、文化の発信地としても発展を続けております。

今回報告いたします中里前原遺跡は、周辺地域の発

掘調査の結果、弥生時代後期を中心とした集落跡であることが明らかになっております。中里前原遺跡の北側には、同時期の環濠集落中里前原北遺跡、南側には墓跡を中心とする上太寺遺跡が隣接しており、中里地区一帯は、環濠集落と墓域からなる埼玉県を代表する弥生時代後期の遺跡であります。

今回の調査では主に弥生時代後期の集落跡・墓跡が発見され、環濠外部の状況と周辺集落の成り立ちがわかかってまいりました。そのほか、縄文時代早期の炉穴や中期の住居跡から多数の遺物が出土し、貴重な資料を得ることができました。

本書は、これらの成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及啓発の参考資料として、広く活用していただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整にご尽力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまでご協力いただきました埼玉県住宅都市部住宅建設課、与野市教育委員会、並びに地元関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成11年3月






財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例言

1. 本書は、埼玉県与野市に所在する中里前原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番および発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。
中里前原遺跡(NKZ T)
与野市大字中里字前原141番地他
平成9年1月13日付け教文第2-192号
3. 発掘調査は、県営与野中里団地建替え事業にともなう事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県住宅都市部住宅建設課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第1章の組織により実施した。本事業のうち発掘調査については、浅野晴樹、書上元博が担当し、平成9年1月1日から平成9年3月31日まで実施した。整理報告書作成事業は岩田明広 が担当し、平成10年10月1日から平成11年3月31日まで実施した。
5. 遺跡の基準点測量および航空写真測量は株式会社アイシーに、遺物の巻頭カラー写真は小川忠博氏に、それぞれ委託した。
6. 発掘調査における写真撮影は浅野・書上が行い、遺物写真撮影は岩田が行った。
7. 出土品の整理および図版の作成は岩田が行い、縄文時代の遺物については金子直行の協力があった。本書の執筆は1-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、その他を岩田が行った。
8. 本書の編集は、岩田があたった。
9. 本書にかかる資料は平成10年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。
10. 本書の作成にあたり、与野市教育委員会、袋井市教育委員会、掛川市教育委員会、井村広巳・柿沼幹夫・佐藤康二・戸塚和美・秦野昌明・松井一明の諸氏からは御教示・御協力を賜った。記して謝意を表するものである。

凡例

- 全体図等のX、Yによる座標表示は、国家標準直角座標第IX系に基づく座標値を示し、方位は全て座標北を表す。
- グリッドは10×10m方眼を設定した。グリッドの名称は、方眼の北西隅の杭番号である。
- 遺構の表記記号は次のとおりである。
S J…住居跡 S R…方形周溝墓
S K…土壌 S D…溝跡 S X…不明遺構
- 遺構挿入図の縮尺は次のとおりである。例外的なものについてはスケールで示した。
遺構全測図1/350
住居跡・掘立柱建物跡1/60
方形周溝墓1/80 土壌 1/60
断面図1/60
- 挿入図中のスクリーントーンは、以下の各事項を表すが、例外については、その都度示した。また、遺物図における網かけは赤彩部位を示す。

	地山		焼土
	炭化物		床下層
	柱痕跡		
- 遺物挿入図の縮尺は次のとおりである。例外についてはスケールを示した。
土器1/4 縄文時代中期土器1/5
土製品・金属製品1/2 石器・土器拓影1/3
- 遺物観察表の計測値は、()内が推定値、単位はcmおよびgである。
- 遺物観察表における遺物の色調は、新版標準土色帳(農林水産省農林水産技術会議事務局監修1994年版)に準じた。
- 遺物観察表の胎土は、含有砂屑物のうち砂粒鉱物等を肉眼観察し、下のよう表記した。
A…透明・半透明鉱物 B…輝石・角閃石
C…黒雲母 D…白雲母 E…金雲母
F…チャート G…灰黄粒 H…赤色粒
I…その他の砂粒
- 遺物観察表の焼成は次のとおりである。
A…よい B…ふつう C…わるい
- 遺物観察表の備考欄には整形・装飾等について記した。各工具の別は、下例によるが、工具に冠した語は工具そのものの状況を、()で後に付した語は調整状況を示す。
ハケ…ハケ状工具
ヘラ…繊維痕のみえないヘラ状工具
板…繊維痕のある工具
(例)粗ハケ後ミガキ(粗)…目の粗いハケ状工具によるナデの後、器面に粗いミガキを施す

目次

口絵
序
例言
凡例
目次

I 発掘調査の概要.....	1	2. 弥生時代	36
1. 調査に至るまでの経過	1	(1)住居跡	36
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	(2)方形周溝墓	82
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	3	(3)グリッド出土遺物.....	86
II 遺跡の立地と環境.....	4	3. その他	87
III 遺跡の概要	10	(1)溝跡	87
IV 遺構と遺物	18	(2)土壌	87
1. 縄文時代	18	(3)不明遺構	98
(1)住居跡	18	(4)ピット	100
(2)竈穴	31	V 調査の成果	104
(3)グリッド出土遺物.....	32	引用・参考文献	116

挿 図 目 次

第1図	埼玉県の地形……………	4	第36図	第7号住居跡掘り方……………	52
第2図	周辺の遺跡……………	5	第37図	第7号住居跡遺物出土状況……………	54
第3図	明治年間の周辺の地形……………	7	第38図	第7号住居跡出土遺物……………	55
第4図	従来の調査範囲と周辺の現地形……………	11	第39図	第9号住居跡および出土遺物……………	56
第5図	基本層序……………	13	第40図	第10号住居跡および掘り方……………	58
第6図	中里前原遺跡全測図……………	14	第41図	第10号住居跡遺物出土状況……………	59
第7図	中里遺跡群遺構図(1)……………	15	第42図	第10号住居跡出土遺物……………	60
第8図	中里遺跡群遺構図(2)……………	16	第43図	第11号住居跡……………	62
第9図	遺跡内の地勢……………	17	第44図	第11号住居跡掘り方および出土遺物……………	63
第10図	第4号住居跡……………	18	第45図	第12号住居跡および出土遺物……………	64
第11図	第4号住居跡出土遺物……………	19	第46図	第13号住居跡および掘り方……………	64
第12図	第8号住居跡……………	20	第47図	第15号住居跡および掘り方……………	66
第13図	第8号住居跡炉跡および埋裏……………	21	第48図	第15号住居跡出土遺物……………	67
第14図	第8号住居跡出土遺物(1)……………	22	第49図	第17号住居跡および掘り方……………	69
第15図	第8号住居跡出土遺物(2)……………	23	第50図	第17号住居跡出土遺物……………	70
第16図	第14号・第16号住居跡……………	25	第51図	第18号住居跡および掘り方……………	72
第17図	第14号・第16号住居跡出土遺物……………	26	第52図	第18号住居跡遺物出土状況……………	73
第18図	第23号住居跡および遺物出土状況……………	28	第53図	第18号住居跡出土遺物……………	74
第19図	第23号住居跡出土遺物……………	29	第54図	第19号住居跡および遺物出土状況……………	75
第20図	第24号住居跡および出土遺物……………	30	第55図	第19号住居跡掘り方および出土遺物……………	76
第21図	炉穴……………	31	第56図	第20号住居跡および掘り方……………	78
第22図	縄文時代グリッド出土遺物(1)……………	33	第57図	第20号住居跡出土遺物……………	79
第23図	縄文時代グリッド出土遺物(2)……………	35	第58図	第21号住居跡および出土遺物……………	80
第24図	第1号住居跡および遺物出土状況……………	37	第59図	第22号住居跡および出土遺物……………	82
第25図	第1号住居跡出土遺物……………	38	第60図	第1号方形周溝墓……………	83
第26図	第2号住居跡および出土遺物……………	39	第61図	第2号方形周溝墓……………	84
第27図	第3号住居跡および掘り方……………	40	第62図	方形周溝墓出土遺物……………	85
第28図	第3号住居跡遺物出土状況……………	41	第63図	弥生時代グリッド出土遺物……………	86
第29図	第3号住居跡出土遺物……………	42	第64図	第1号溝跡……………	87
第30図	第5号住居跡……………	44	第65図	土壌(1)……………	90
第31図	第5号住居跡掘り方および遺物出土状況……………	46	第66図	土壌(2)……………	95
第32図	第5号住居跡出土遺物(1)……………	47	第67図	土壌(3)および出土遺物……………	97
第33図	第5号住居跡出土遺物(2)……………	48	第68図	不明遺構(1)……………	98
第34図	第6号住居跡および出土遺物……………	50	第69図	不明遺構(2)……………	99
第35図	第7号住居跡……………	51	第70図	ビット……………	101

図 版 目 次

- | | | |
|------|----------------------------------|---|
| 図版1 | 中里前原遺跡と中里前原北遺跡 (合成) | 第10号住居跡遺物出土状況 |
| 図版2 | 調査範囲北半
調査範囲南半 | 図版18 第11号住居跡
第11号住居跡炉跡 |
| 図版3 | 調査範囲北半の遺構群
第8号住居跡 | 図版19 第12号住居跡
第15号住居跡 |
| 図版4 | 第8号住居跡炉跡
第8号住居跡埋甕 | 図版20 第15号住居跡遺物出土状況
第17号住居跡 |
| 図版5 | 第14・第16号住居跡
第14・第16号住居跡遺物出土状況 | 図版21 第18号住居跡
第18号住居跡遺物出土状況 |
| 図版6 | 第16号住居跡炉跡
第23号住居跡 | 図版22 第18号住居跡基層掘り込み (床下)
第19号住居跡 |
| 図版7 | 第1・第2号炉穴
第3号炉穴 | 図版23 第19号住居跡遺物出土状況
第19号住居跡貯蔵穴 |
| 図版8 | 第1号住居跡
第1号住居跡遺物出土状況 | 図版24 第20号住居跡
第21号住居跡 |
| 図版9 | 第1号住居跡炉跡
第2号住居跡 | 図版25 第21号住居跡遺物出土状況
第1号方形周溝墓 |
| 図版10 | 第2号住居跡遺物出土状況
第3号住居跡 | 図版26 第1号方形周溝墓銅鏡出土状況
第2号方形周溝墓 |
| 図版11 | 第3号住居跡遺物出土状況
第3号住居跡遺物出土状況 | 図版27 第11図1
第14図1
第14図3
第14図6
第19図1
第19図2 |
| 図版12 | 第5号住居跡
第5号住居跡遺物出土状況 | 図版28 第4・第8号住居跡出土遺物 (第11・15図)
第8号住居跡出土遺物 (第15図) |
| 図版13 | 第6号住居跡
第7号住居跡 | 図版29 第14・第16号住居跡出土遺物 (第17図)
第23号住居跡出土遺物 (第19図) |
| 図版14 | 第7号住居跡遺物出土状況
第7号住居跡炉跡 | 図版30 縄文時代グリッド出土遺物 (第22図)
縄文時代グリッド出土遺物 (第22図) |
| 図版15 | 第7号住居跡貯蔵穴
第9号住居跡 | 図版31 縄文時代グリッド出土遺物 (第22図) |
| 図版16 | 第10号住居跡
第10号住居跡遺物出土状況 | |
| 図版17 | 第10号住居跡遺物出土状況 | |

	縄文時代グリッド出土遺物 (第22・23図)	第50図12
図版32	縄文時代グリッド出土遺物 (第23図)	第53図1
	第17図11	第53図1
図版33	第25図2	図版39 第53図2
	第26図2	第53図3
	第29図1	第55図1
	第29図1	第55図2
	第29図2	第57図1
	第29図2	第57図4
図版34	第29図3	図版40 第58図1
	第29図6	第58図1
	第29図7	第59図2
	第29図8	第62図4
	第32図1	第68図1
	第32図1	第18号住居跡出土獣骨
図版35	第32図3	図版41 第1・第2号住居跡出土遺物 (第25・26図)
	第32図4	第3号住居跡出土遺物 (第29図)
	第32図5	図版42 第3号住居跡出土遺物 (第29図)
	第32図15	第5号住居跡出土遺物 (第32図)
	第33図20	図版43 第5号住居跡出土遺物 (第32図)
	第34図1	第7号住居跡出土遺物 (第38図)
図版36	第38図7	図版44 第7号住居跡出土遺物 (第38図)
	第42図2	第7号住居跡出土遺物 (第38図)
	第42図3	図版45 第9・第10号住居跡出土遺物 (第39・42図)
	第42図1	第11号住居跡出土遺物 (第44図)
	第42図1	図版46 第15号住居跡出土遺物 (第48図)
	第42図1	第17号住居跡出土遺物 (第50図)
図版37	第42図5	図版47 第18～22号住居跡出土遺物 (第53～59図)
	第45図1	土壌出土遺物 (第67図)
	第48図2	図版48 弥生時代グリッド出土遺物 (第63図)
	第48図1	出土石器 (第23図)
	第48図1	図版49 出土石器
	第48図1	出土石器
図版38	第48図5	図版50 玉・土製品
	第48図6	銅鏃 (第62図5)
	第50図4	

I 発掘調査の概要

1. 調査に至るまでの経過

埼玉県では、「環境優先」「生活重視」「埼玉の新しい国づくり」を基本理念とし、さまざまな施策を展開しているところである。豊かな彩の国づくりに向けた施策の中で、「快適でうるおいのある生活空間の形成」として、「質の高い住まいづくりと住環境の整備」を積極的に進めている。とくに、多様化する県民の住宅需要に応じて、すべての県民が安全で快適な住生活を営むことができるよう、計画的な住宅供給の促進を図っている。

県教育局生涯学習部文化財保護課では、このような施策の推進に伴う文化財の保護について、従前より関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

平成7年度に住宅建設課長より、県営住宅建設予定地における埋蔵文化財等の所在の有無及びその取り扱いについての照会を受け、文化財保護課では、次のように住宅建設課長あてに回答した。

1 埋蔵文化財の所在

名称	種別	時代	所在地
中里前原遺跡 (No03-025)	集落跡	弥生	与野市大字大戸 720番地他

2 取り扱いについて

上記の埋蔵文化財包蔵地は現状保存するのが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づく文化庁長官あての発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査をしてください。

その後、住宅建設課と文化財保護課の間で取り扱いについて協議を行ったが、計画変更による現状保存が困難であることから、記録保存の措置をとることとなった。発掘調査の実施機関である(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団を含めて、工事日程や調査計画、経費等についての協議を行い、その結果平成9年1月1日から3月31日までの期間で、発掘調査を実施することとなった。

発掘調査に先立って、文化財保護法第57条の3の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から提出され、また同法第57条1項の規定による発掘調査届が、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。

発掘調査届に対する指示通知番号は次のとおりである。

平成9年1月13日付け 教文第2-192号

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

中里前原遺跡の調査は、平成9年1月1日から平成9年3月31日まで行った。調査面積は約3,200㎡である。

中里前原遺跡における発掘調査の実施経過は、以下のとおりである。

調査は、掘削土を場内処理したため、北側の2,000㎡と南側の1,200㎡とに2分割して行った。

1月上旬、住宅建設課と調査方法・日程等について打ち合わせを行った。周辺住宅への砂塵飛散および騒音防止のため、シートパイルによるフェンスを設置した。同時に、現場事務所を設置し、北側2,000㎡について、表土掘削および遺構確認を開始した。

1月中旬、検出した遺構から調査を開始し、並行して基準点測定を行った。

1月下旬～2月中旬、検出した遺構について、順次、精査、測量、写真撮影等を行い、2月下旬をもって北側部分の調査を終了した。

2月末、南側部分の重機による掘削を開始し、3月上旬をもって掘削を終了した。

3月上旬、確認した遺構について、順次、精査・測

量等を行った。

3月下旬、遺構の測量・写真撮影等を終了した。現場事務所の撤去・器材搬出を行い、3月末日をもって、中里前原遺跡に関するすべての調査を終了した。

整理・報告書刊行

整理事業は、平成10年10月1日から平成11年3月31日まで実施した。

平成10年10月初から、遺物の水洗・注記・遺構図面の整理を開始した。遺物については、水洗・注記終了後、接合・復元・実測を行った。

11月下旬、遺物の復元と平行して、遺物図面のトレースを開始した。また、復元終了後、遺物写真撮影を行った。

12月上旬、遺物の委託写真撮影を行った。

12月中旬以後、遺構・遺物図面のトレース、および遺構図・遺物図の版組を行い、平行して割付、原稿執筆を行った。

平成11年3月下旬、入札を経て、校正作業を行い、3月末に本書を刊行した。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査 (平成8年度)

理事長	荒井 桂
副理事長	富田 真也
専務理事	吉川 國男
常務理事	稲葉 文夫
兼管理部長	
理事兼調査部長	小川 良祐
管理部	
庶務課長	依田 透
主 査	西沢 信行
主 任	長滝 美智子
主 事	菊池 久
専門調査員	関野 栄一
兼経理課長	
主 任	江田 和美
主 任	福田 昭美
主 任	腰塚 雄二
調査部	
調査部副部長	高橋 一夫
調査第三課長	村田 健二
主 査	浅野 晴樹
主任調査員	書上 元博

(2) 整理・報告書刊行 (平成10年度)

理事長	荒井 桂
副理事長	飯塚 誠一郎
常務理事	鈴木 進
兼管理部長	
管理部	
庶務課長	金子 隆
主 査	田中 裕二
主 任	長滝 美智子
主 任	腰塚 雄二
専門調査員	関野 栄一
兼経理課長	
主 任	江田 和美
主 任	福田 昭美
主 任	菊池 久
資料部	
資料部長	増田 逸朗
主幹	小久保 徹
兼資料部副部長	
資料整理第二課長	市川 修
主任調査員	岩田 明広

II 遺跡の立地と環境

埼玉県の地形は、西部を占める上武・奥秩父・外秩父の各山地と、県土の中心部を南北に連なる丘陵・台地、利根川・中川・荒川によって形成された北部から東部に広がる低地帯の3つに分けられる。

丘陵・台地、低地については、関東平野の一部をなすもので、埼玉平野とよばれている。低地は県北東部の利根川中流低地と、県南東部の東部低地からなる。東部低地は、中央に孤立する大宮・安行・蓮田・岩槻・白岡・慈恩寺の各台地からなる台地群をはさんで、東が中川低地、西が荒川低地とよばれている。

中里前原遺跡が所在する与野市は、荒川低地をのぞむ大宮台地南西部に立地している。大宮台地は、主に更新世のうち武蔵野期に形成されたと考えられている。台地内は中小河川による開折がすすみ、樹枝状の谷系が発達し、西から指扇・日進与野・浦和・大和田片柳の各支台に区分できる。

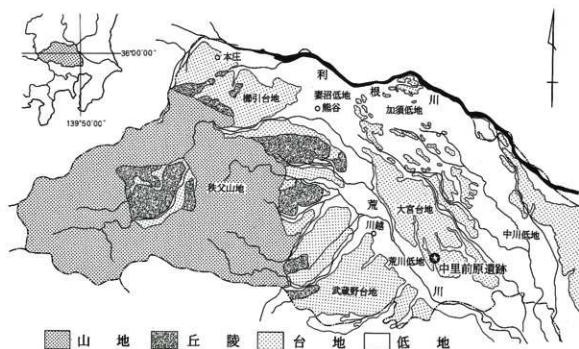
中里前原遺跡は、西を鴻沼川、東を芝川に限られた浦和支台西縁部に位置する。台地上面付近の標高は13~14m程度である。眼下には、享保年間に干拓・水

田化した、標高5~6m程度の鴻沼低地が鴻沼川(霧敷川)に沿って広がっている。地勢は鴻沼川へ向かう北西傾斜である。

周辺地域には、各支台の縁辺を中心に、多数の遺跡が濃密に分布している。

当地域に人跡が標されるのは、低地・侵食谷に面した大宮台地南西部が最初である。現在までのところ、ナイフ形石器・影器等を出土した明花向遺跡A区が最古と考えられている(田中他1984)。鴻沼川周辺では、日進与野支台の陣屋遺跡・真土遺跡、浦和支台の神明遺跡等でナイフ形石器・尖頭器等が出土している。芝川流域の浦和支台東部では、尖頭器をともなう石器集を出した大古里遺跡、ナイフ形石器を出した松木遺跡・馬場北遺跡が分布する。また、鴨川流域では、指扇支台でナイフ形石器・尖頭器を出した原遺跡(立木他1985)、日進与野支台で剥片類を出した内道西遺跡、間ノ谷遺跡等がある。なお、中里前原遺跡の南に接する上太寺遺跡では剥片等が、札ノ辻遺跡・小村田東遺跡・関東遺跡では石器集が出土している。

第1図 埼玉県の地形





- | | | | | | | | | | | |
|------------|-------------|------------|-------------|-------------|------------|-----------|-------------|-----------|-------------|-----------|
| 1 中聖院前道路 | 10 小村田内道路 | 19 石舞道路 | 28 文楽館跡 | 37 洲田天神後道路 | 46 笠岡神社道路 | 55 西陣後道路 | 64 高橋北道路 | 73 公鳴道路 | 82 A-119号道路 | A 観音堂橋跡 |
| 2 中聖院前北道路 | 11 小村田外道路 | 20 八丁下線原道路 | 29 上土久保新川道路 | 38 櫻畑道路 | 47 中聖堂前道路 | 56 南庭跡 | 65 高橋十重山道路 | 74 丹波力道路 | 83 三好小橋跡 | B 藤十丹戸小橋跡 |
| 3 上土久保道路 | 12 西線道路 | 21 大久保赤土道路 | 30 裏筋坂道路 | 39 染中屋 | 48 二茂塚山道路 | 57 朝陽神社道路 | 66 柳水道路 | 75 南河内道路 | 84 上野田西台道路 | C 白旗志古橋跡 |
| 4 本村土道路 | 13 小村田橋跡 | 22 鞍掛寺坂内道路 | 31 藤原道路 | 40 山崎中島道路 | 49 札ノ辻道路 | 58 B-1号道路 | 67 柳町道路 | 76 柳中丸道路 | 85 代山山尊 | D 大久保古橋跡 |
| 5 本村土原の内道路 | 14 鞍掛石 | 23 万石坂内道路 | 32 山久保道路 | 41 本村道路 | 50 香ノ前道路 | 59 倉山道路 | 68 裏筋道路 | 77 中ノ丸道路 | 86 下加賀屋 | E 中島古橋跡 |
| 6 田ノ谷道路 | 15 白旗海岸道路 | 24 百ノ上道路 | 33 赤木道路 | 42 大久保家片町道路 | 51 土人字山道路 | 60 山崎川岸 | 69 本太六丁狂道跡 | 78 陣屋合道路 | 87 菓酒跡 | |
| 7 B-185号道路 | 16 守田道路 | 25 興道跡 | 34 真長山院跡 | 43 大久保家東道路 | 52 曲成道路 | 70 山崎川 | 79 郡山竹ノ倉家道路 | 79 陣屋山中道路 | 88 徳兵衛跡跡 | |
| 8 陣屋道路 | 17 八丁下線ノ筋道路 | 26 内庭内道路 | 35 吉田門道路 | 44 大久保家内庭跡 | 53 大久保本村道路 | 71 大北道路 | 72 西行道路 | 80 観音白旗道路 | | |
| 9 小村田橋跡 | 18 白旗山古墳 | 27 矢倉道路 | 36 塚本家新地道路 | 45 神町道路 | 54 大久保屋 | 73 北野道路 | | 81 鶴山道路 | | |

縄文時代に入ると、遺跡の立地傾向は台地上に広く展開する。

草創期では、日進与野支台の山久保遺跡、大和田片柳支台のえんぎ山遺跡が著名である。早期では、浦和支台東縁の芝川流域に大古里遺跡（青木・高野1976）・北宿西遺跡（中村他1989）・明花向遺跡（田中他1984）・大北遺跡・駒前遺跡・駒形遺跡があるほか、日進与野支台西縁の水判土遺跡等がある。また、鴻沼川東岸の浦和支台には、中里宮前遺跡・中里前原遺跡等が確認されている。早期末の特色である多数の炉穴を検出した遺跡には、芝川右岸の浦和支台上を中心に大北遺跡・大古里遺跡・明花向遺跡・馬場小室山遺跡等がある。

早期末までには、海進にともない貝塚の形成がはじまる。鶴ヶ島式土器を出土した大宮市下加貝塚は、大宮台地最古の貝塚である。

前期には海進がピークを迎え、古入間湾の形成によって、台地縁辺部を中心に貝塚・集落が増加した。黒浜期では浦和支台芝川流域の山崎貝塚・大古里遺跡・代山貝塚、鴻沼川流域の大戸貝塚、花積下層式段階では浦和市大芝川右岸の北宿遺跡、関山段階では浦和支台の大古里遺跡・非沼方遺跡・関山貝塚などがある。前期後葉には、台地上面の遺跡は極端に減少する。浦和支台では、最小の土偶を出土した松木遺跡、本太五丁目遺跡、皇山遺跡（村田1998）等が確認できる程度である。

中期から後期初頭頃には、近年の調査によって、遺跡規模は小さいものの、当地域でも集落遺跡が増加することがわかってきた。浦和支台の中里前原遺跡・根岸遺跡・二度栗山遺跡、日進与野支台の西浦遺跡等は、五領ヶ台式土器を出土した数少ない遺跡である。加曾利EⅢ式段階から称名寺式段階の遺跡は多く、鴻沼川右岸で日進与野支台の巽遺跡・札ノ辻遺跡・本李遺跡、芝川右岸で浦和支台西部の馬場小室山遺跡（青木他1983・中村他1985等）・原山坊ノ在家遺跡（柳田他1987）等がある。

後期から晩期になると遺跡規模・数ともに減少する。

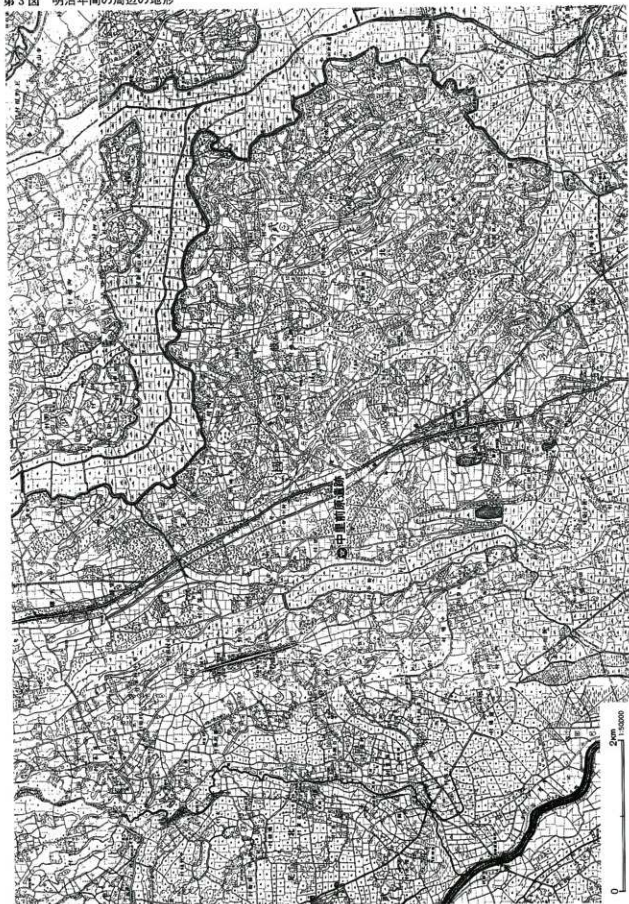
後期の遺跡には、浦和支台西縁の中里前原遺跡・神明遺跡・大戸本村遺跡・南遺跡、日進与野支台の内道西遺跡等がある。他に寿能泥炭層遺跡・南鴻沼遺跡では、漆器・植物遺体等が検出されている。晩期の遺跡には、安行式段階の土偶裝飾付土器・人面付土器を出土した浦和支台の馬場小室山遺跡（青木他1983等）をはじめ、曲庭遺跡・白幡中学校校庭遺跡・内道西遺跡等があり、白幡中学校校庭遺跡では、荒海式段階の住居跡も検出されている（青木他1977）。

周辺地域における弥生時代の遺跡は、現在のところ、旧入間川によって形成された自然堤防に立地する本村遺跡が初現である。かつて須和田式といわれた土器を出土した中期中葉の集落跡である。現在のところ、大宮台地におけるその他の遺跡は、中期後半の宮ノ台式期以後に属し、台地縁辺部を中心に確認されている。元荒川の東に目を移せば、慈恩寺台地上に中期中葉の諏訪山遺跡・南遺跡が存在しており、今後、大宮台地でも中期中葉以前の遺跡例が増加すると思われる。

宮ノ台式期の遺跡は、小規模ながら、広く分布が確認されるようになった。鴻沼川兩岸に広がる鴻沼低地を見下ろす日進与野支台には、住居跡1軒を出した内道西遺跡・諏訪坂遺跡がある。綾瀬川右岸の鳩ヶ谷支台には、住居跡16軒を検出した上野田西台遺跡（青木他1987等）、住居跡1軒・土壇等を検出した谷ノ前遺跡（青木他1989）、綾瀬川を遡ると、住居跡2軒を出した深作東部遺跡群Bブロック（山形・諸墨1984）がある。

芝川流域では、左岸の大和田片柳支台西端に住居跡4軒を出した大和田本村遺跡、住居跡2軒・土壇・溝跡を出したA-165号遺跡、支台上面には住居跡5軒と環濠を出した御藏山中遺跡のほか、住居跡3軒・再葬墓とみられる土壇等を出した南中野遺跡（安岡1977）、住居跡を出した南中丸遺跡、土壇を出した御藏台遺跡（埼玉県教育委員会1981）が集中して確認されている。右岸では、浦和支台縁辺に沿って北から、住居跡1軒を出した北宿遺跡、住居跡3軒を出した松木遺跡、住居跡8軒・土壇等を出した大北遺跡、住居跡1軒を出した吉場遺跡・西谷遺跡が列状に分布する。

第3図 明治年間の周辺の地形



このほか浦和支台上面には、東から、住居跡7軒・方形周溝墓3基・溝跡等を出した明花向遺跡、住居跡2軒を出した円正寺遺跡(天野他1991)、住居跡2軒を出した太田窪貝塚、住居跡2軒を出した一ツ木遺跡等がある。

後期の遺跡は、いわゆる弥生町式期を中心として、台地上面のほか、自然堤防上に多く確認されている。

鴻沼川および鴻沼低地をのぞむ浦和支台上面には、環濠集落と墓域からなる中里前原遺跡(宮内1980等)・中里前原北遺跡(西口1996)、前者の墓域と考えられる上太寺遺跡がある。中里地域の遺跡群は、同一遺跡と考えられ、本書報告時点で合計住居跡63軒・方形周溝墓9基・環濠とみられる溝跡等を有する埼玉県を代表する集落遺跡で、一部は古墳時代初頭に下る可能性がある。詳細は「III 遺跡の概観」に記す。浦和支台には、ほかに住居跡1軒を出した明花向遺跡、住居跡3軒を出した円正寺遺跡(天野他1991)が分布している。古墳時代初頭にかかる時期の遺跡では、方形周溝墓9基を出した関東遺跡(大谷1998)があるが、1998年度の与野市教育委員会による発掘調査の結果、南側に弥生後期以後の集落が隣接することが明らかになった。

鴻沼川対岸の日進与野支台では、住居跡50軒・方形周溝墓3基が検出された札之辻遺跡、住居跡46軒を出した須黒神社遺跡等がある。

芝川右岸の浦和支台東縁では、環濠の内外に計34軒の住居跡が検出された北宿遺跡、住居跡33軒を出した浦和市馬場北遺跡(中村他1988)が小支谷を挟んで対峙するほか、方形周溝墓の主体部から鉄剣とガラス玉を出した井沼方遺跡(柳田他1994)、住居跡3軒を出した大北遺跡、住居跡7軒を出した西谷遺跡等がある。

大和田片柳支台では、見沼低地に突き出した台地端部に住居跡18軒を出した三崎台遺跡(笹森他1996)等がある。後期末から古墳時代初頭にかかる時期の遺跡には、住居跡7軒を出した三崎台遺跡、住居跡18軒を出した染谷遺跡群(山口他1986)、住居跡5軒を出したA-239号遺跡(三崎台遺跡の一部、山口他1989)、方形

周溝墓4基等を出した篠山遺跡のほか、鎌倉公園遺跡・後遺跡等が挙げられる。

大和田片柳支台と対する鳩ヶ谷支台では、住居跡21軒を出した上野田西台遺跡、住居跡1軒を出した谷ノ前遺跡、綾瀬川上流右岸に位置し、住居跡9軒・溝跡を出した深作東部遺跡群等がある。弥生時代末から古墳時代初頭にかかる遺跡は、上野田西台遺跡を除き綾瀬川右岸の台地上に点在しており、66軒の住居跡を出した尾山台遺跡を筆頭に、住居跡4軒を出した深作東部遺跡群、住居跡8軒を出した丸ヶ崎遺跡群、住居跡4軒を出した膝子八幡神社遺跡、宮ヶ谷塔遺跡等がある。

古墳時代前期のうち、五領期併行以後の遺跡は、現在のところ弥生時代後期から古墳時代初頭の遺跡に比べ多くない。芝川流域および日進与野支台に集中する傾向があるが、自然堤防上でも検出が続いており、低地に進出した傾向がうかがえる。今後、低地の調査が増えるにつれ、検出例も増加することになるだろう。

浦和支台では中里前原遺跡のほか、鴻沼川に面した別所遺跡、芝川をのぞむB-5号遺跡が知られている。

日進与野支台では、8軒の住居跡を出した白銀宮腰遺跡(岩田1998)のほか、住居跡2軒・円墳1基を出した西浦遺跡、多数の方形周溝墓を検出した大久保領家片町遺跡(柳田他1996等)、鴻沼川を望む矢垂遺跡・原遺跡等がある。

荒川低地をのぞむ自然堤防上の遺跡も近年事例が増加しつつあり、五関中島遺跡(君島1996)、本村遺跡、上大久保新田遺跡、神田天神後遺跡(君島1999)等がある。

当該時期の大宮台地南部では、古墳の状況が明確になっていない。川口市高稲荷古墳が最初の例といわれるが、内容については詳らかでない。

古墳時代中期になると、日進与野支台に白銀塚山古墳が出現する。出土した円筒埴輪から、5世紀後半の築造と考えられている(山田他1989)。大宮台地南部には、当該期の集落は少なく、日進与野支台には住居跡4軒を出した白銀宮腰遺跡、山久保遺跡、札ノ辻遺跡、浦和支台には鴻沼川左岸の別所遺跡、空間神社遺跡、

芝川右岸の水深北遺跡等がある。白銀遺跡・八王子殿ノ前遺跡では、古式須恵器が出土して話題になった。八王子殿ノ前遺跡の樽形甕と高杯は渡来品と推定されている。

後期には、台地上および自然堤防上に広く群集墳が形成される。荒川低地を望む日進与野支台縁辺に密集する白銀古墳群、大久保古墳群、側ヶ谷戸古墳群、植水古墳群、中島古墳群等が著名である。なお、与野市域に属する古墳は、側ヶ谷戸古墳群中の西浦1号墳と中島古墳群に隣接する終末期方墳の今宮1号墳だけである。

同時期の集落は、古墳群と関連した立地条件に成立している。日進与野支台と荒川低地に形成された自然堤防上の根切遺跡第3地点(宮滝1993)のほか、水判土塚の内遺跡(宮滝1993)・堤根遺跡・上大久保新田遺跡(柳田他1987)・本村遺跡・B-105遺跡・塚本東耕地遺跡・古貝戸遺跡・諏訪坂遺跡は典型的な立地を示している。なお、浦和支台には笠間神社遺跡等がある。

奈良・平安時代では多くの集落が検出されている。浦和支台には墨書土器を出した八王子前原遺跡をはじめ、上峰遺跡・寺田遺跡等が、日進与野支台から荒川低地にかけては、白銀宮腰遺跡・水判土塚の内遺跡・根切遺跡・観音寺境内遺跡・大泉院境内遺跡・宮田墓地遺跡・大久保額家片町遺跡・本村遺跡等がある。

律令期の生産遺跡には荒川低地に広がる大久保条里遺跡がある。調査では、南北方向の溝状遺構と畦畔状

遺構が検出された(君島1999)が、水田跡の存在は明確になっていない。

中世段階の遺跡には、鎌倉時代の中国製青白磁をもつ住居跡を検出した大久保額家遺跡(山田他1996)、鎌倉幕府御家人足立右馬允遠元の館跡と推定される根切遺跡、真鳥日向守の館跡と推定される真鳥山城遺跡(柳田他1997)のほか、矢垂館跡・小村田館跡等がある。これらの館跡は、現在の与野市本町付近を通じていた鎌倉街道中道伝承路(羽倉街道)に沿って点在している。また鈴谷の妙行寺には、正元二(1260)年の銘を刻む与野市最古の板石塔婆がある。

近世の大宮台地南部では、大規模な開拓が行われた。慶長年間(1596~1615)には、伊奈備前守忠次によって備前堤が築かれ、享保改革にともなう新田開発では、享保十三(1728)年、井沢弼愷兵衛為永の指揮のもと紀州流干拓工法によって「見沼」が水田化された。翌享保十四(1729)年には、現中浦和駅辺の「鴻沼」が干拓され、水田となっている。鴻沼低地の水田は、減反政策と宅地化によってほとんどが失われてしまった。小村田・小村田西遺跡で検出された溝跡は、開発にかかわるものと推定されている(大谷1998)。

その他の近世遺跡には、18世紀代の陶器・瓦を出土した庚申塚(高山他1983)等がある。また、上太寺遺跡付近には、足利高金墓ともいわれる黄金塚の存在が伝えられている。

III 遺跡の概要

地勢および過去の調査成果の概要

中里前原遺跡は、鴻沼低地に面した大宮台地南西部の浦和支台西端に立地している。標高は13~14m程度である。西側には、南流する鴻沼川（霧敷川）に沿って標高5~6m程度の鴻沼低地が広がる。台地上面との比高差は8m程度である。

大日本帝国参謀本部陸軍部測量局による1880（明治十三）年測量の迅速図（第3図）によれば、遺跡範囲から主に南東が林地、南北両側が農地となっており、鴻沼低地に張り出す台地先端部にあたるのがわかる。現地勢は鴻沼川へ向かう北西傾斜であるが、迅速図の状況からみて、元来の地勢は遺跡中央部がもっとも高く、四方へ傾斜していたものと考えられる。

周辺地区では、すでに数次にわたり調査が行われており、中里前原遺跡が連続する遺跡群の一角を占めるものであることが明らかになっている。各遺跡は、北から中里前原北遺跡・中里前原遺跡・上太寺遺跡と呼称されている。

遺跡群は、主に縄文時代早期・前期の土壇・炉穴、中期後半から後期初頭頃の集落跡、弥生時代後期から古墳時代初頭頃の集落跡および墓域によって構成されている。遺跡の概要と遺跡群相互の関係を整理する目的で、以下に、本書報告までの調査成果をまとめておこう。

遺跡群周辺で埋蔵文化財の存在が把握されたのは、中里前原遺跡が最初である。1977（昭和52）年7月に行われた与野市史編纂にともなう分布調査によるもので、約2,000㎡で遺物の分布が確認された。同年8月、同地に集合住宅が建設されることになり、翌1978（昭和53）年2月、遺跡群初の発掘調査が中里前原遺跡調査会によって行われた（第1次調査）。1,795㎡の調査で、縄文時代早期末の住居跡1軒、炉穴3基、同後期の住居跡2軒、縄文時代の土壇11基、同中期から後期の遺物包含層、弥生時代後期の住居跡12軒、櫓列の可能性のあるピット群をとまなう2条の断面V字形の溝

跡、断面箱形の溝跡1条、縄文あるいは弥生時代の住居跡の一部と思われる遺構等が検出された。

出土遺物は、遺構の内外から、縄文時代では、早期末~前期初頭の条痕文系土器群、花積下層式土器、前期の黒浜式土器・諾磯a・b・c式土器、中期初頭の五領ケ台式土器、中期前半の勝坂式土器、中期後半~末の加曾利EII・III式土器、後期初頭の称名寺式土器、後期前半の堀之内I式土器、石器類等が、弥生時代では、後期後半でかつて弥生町式土器と呼ばれた一群、双角有孔土製品等が出土している（秦野他1980）。

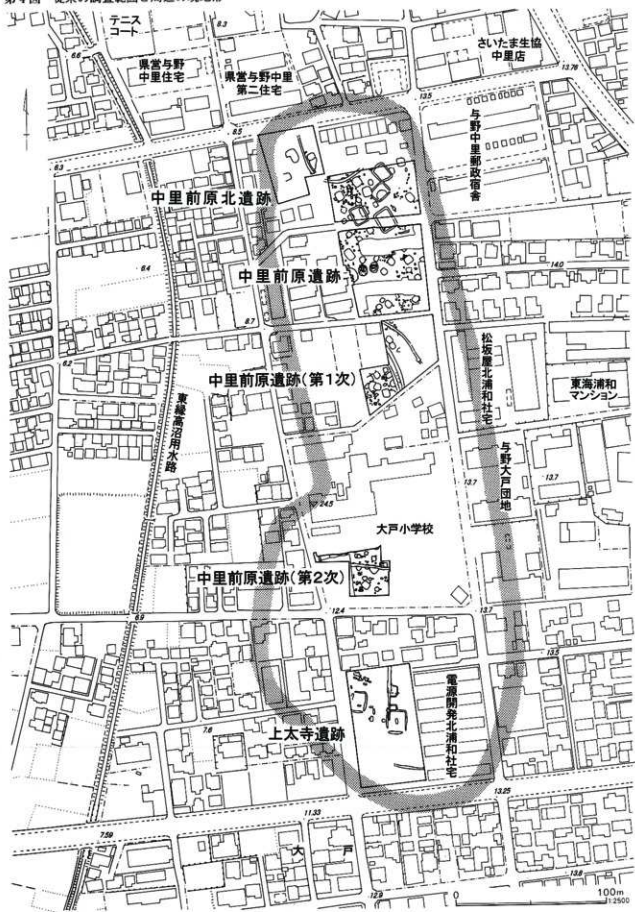
なお、この折、検出されたV字溝を環濠とみることによって、初期の遺物分布範囲は北と南に2分され、北側については中里前原北遺跡と呼称することになった。中里前原遺跡の範囲は、以後、遺跡群中央部の350m×140mの範囲に限られることになった。

1979（昭和54）年には、市立大戸小学校屋内運動場の建設が計画され、翌1980（昭和55）年1月、与野市遺跡調査会によって、前回調査範囲南100mの地点864㎡が発掘された（第2次調査）。検出された遺構は、縄文時代の炉穴2基のほか、弥生時代後期の住居跡12軒、古墳時代前期の住居跡1軒、時期の確定できない土壇41基、溝跡1条等である。

出土遺物は、遺構の内外から、縄文時代では、前期前半の織椎土器の一群、前期末の十三菩提式土器、中期初頭の五領ケ台式土器、中期前半の勝坂式土器、中期後半~末の加曾利EII・III式土器、後期初頭の称名寺式土器、後期前半の堀之内I式土器、石器類等が、弥生時代では、後期後半でかつて弥生町式土器と呼ばれた一群、双角有孔土製品等が、古墳時代では、前期の土器少量が、それぞれ出土している（福田他1980）。

1978（昭和53）年には、中里前原北遺跡内に集合住宅建設が計画された。1980（昭和55）年6月~7月にかけて、建設に先だって約3,000㎡の調査が与野市遺跡調査会によって行われた。検出された遺構は、弥生時代後期の住居跡5軒、同断面V字形の溝跡1条、ほかに

第4図 従来の調査範囲と周辺の現地地形



縄文時代早期から中期の包含層である。

出土遺物は、縄文時代の包含層から、早期の稲荷台式土器・茅山下層式土器、前期の黒浜式土器、諸磯b・c式土器、前期末の十三菩提式土器、中期初頭の五領ヶ台式土器、中期前半の阿玉台式土器・勝坂式土器、中期後半～末の加曾利EⅡ・Ⅲ式土器、後期初頭の称名寺式土器、後期前半の堀之内Ⅰ式土器、石器類等が、弥生時代では、遺構の内外から、かつて弥生町式土器と呼ばれた一群や双角有孔土製品等が検出された（奥村他1988）。

また、1981（昭和56）年6月には、中里原遺跡南の大戸地区に郵政宿舍建設の計画された。周辺の状況に基づく試掘調査の結果、埋蔵文化財の所在を確認され、1981（昭和56）年8月、与野市遺跡調査会による約2,800㎡の発掘調査が行われた。上太寺遺跡と呼称することになった。検出された遺構は、縄文時代中期後半の住居跡1軒、同土壌1基、弥生時代後期の方形周溝墓3基、同溝跡1条、時期不明の土壌等である。

出土遺物は、遺構の内外から、縄文時代では、早期の野島式土器・茅山上層式土器、早期末～前期の花積下層式土器、中期の加曾利EⅢ式土器、後期の称名寺式土器・堀之内式土器・安行式土器、石器類等が、弥生時代では、かつて弥生町式土器と呼ばれた一群等が出土した。

第2号方形周溝墓では、埋葬主体部が検出され、内部からガラス小玉が多量に検出され話題になった（奥村他1988）。

1993（平成5）年には県営住宅建替えが計画され、1995（平成7）年1月から3月まで、埼玉県埋蔵文化財調査事業団が、中里原北遺跡を調査した（第2次）。対象面積は、約2,000㎡であった。検出された遺構は、縄文時代早期の住居跡1軒、同前期の土壌21基、弥生時代後期の住居跡16軒、同方形周溝墓4基、同時期の環濠とおもわれる溝跡1条等である。

出土遺物は、縄文時代では、第84号土壌から草創期と考えられる尖頭器が、住居跡から中期の加曾利EⅡ式土器が、遺構外から早期の夏島式土器・田戸上層式

土器・野島式土器、早期末～前期初頭の下吉井式土器・花積下層式土器、前期の諸磯式土器、中期中葉の新道式土器・阿玉台Ⅰb式土器、中期後半の加曾利EⅡ式土器、後期の称名寺式土器・堀之内式土器、石器類が、弥生時代では、遺構の内外から、かつて弥生町式土器と呼ばれた一群の土器等が出土している（西口1996）。

今回の調査の概要

本書で報告する部分については、1995年の契機と同一の県営住宅建替え事業によるもので、1996年1月から3月まで発掘調査を実施した（以後、第3次と呼ぶ）。対象地域は1995年調査時の南側隣接地3,200㎡であった。

基本層序は、県営住宅による攪乱層が表層から部分的に深く入り込んでおり正確に把握できなかったが、上部に層厚30cm前後の暗褐色シルトを主体とした層、直下にソフトルーム対応の層厚30～40cmのルーム層が続く。ソフトルーム以下の層位については、今回の調査では確認しなかったが、過去の調査状況と対応させると、層厚20～30cmのハードルーム対応のルーム層、黒色帯対応の暗色ルーム層と続くのが一般的といえる。中里地区では、第1黒色帯が認められないことが多いようだ。遺構検出面は、上部の現代建築物による攪乱層を取り除くため、ソフトルーム上面とした。

検出した遺構は、縄文時代早期と思われる炉穴4基、中期後半の住居跡6軒（内2軒は重複）、弥生時代後期の住居跡18軒、同時期の方形周溝墓2基（内1基は北に隣接する中里原北遺跡で検出した方形周溝墓の南半部である）、時期不明の土壌62基、同溝跡1条、時期・性格ともに不明な遺構5基等である。

縄文時代の住居跡は、堅穴部の掘り込みがほとんど遺存しておらず、主に炉跡・埋壘・柱穴の位置関係から把握した。住居跡は、調査範囲中央東側を中心に南北径50m程度の半円の円周上に分布していた。本来環状集落であった可能性が高く、中央部には時期不明の土壌群が認められた。土壌群のいくつかは、縄文時代の集落にともなうものと思われる。

第8号住居跡は、大型の深鉢形土器上半を炉体土器に、下半を埋甕に用いていた。第14・第16号住居跡は、重複する2軒の住居跡で、跡も2ヶ所で確認できた。しかし、柱穴の層位は明瞭に区別できなかったため、先後関係は不明で、柱穴の帰属も一部で混在している。小形の第14号住居跡は地床炉、大形の第16号住居跡は緑泥片岩の石棒を用いた石囲炉を設置していた。

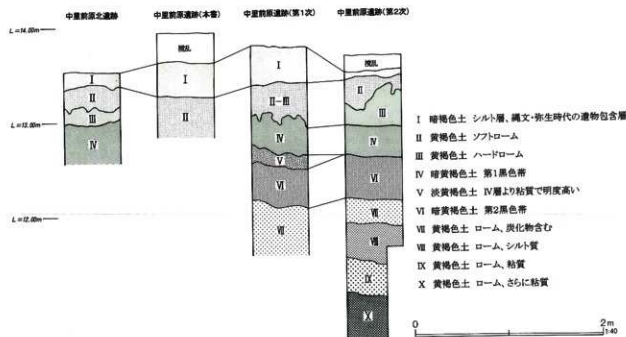
グリッド出土土器は、早期末～前期初頭の花積下層式土器、前期の諾羅式土器、中期後半の加曾利EⅡ～Ⅲ式土器、後期初頭の堀之内式土器、後期中葉の加曾利B式土器等である。

弥生時代後期の住居跡は、主軸方位を北東に向ける一群(SJ1・2・3・5・6・7・15・17・19)と北西に向ける一群(SJ9・11・18・20・21)に分けられる。北東軸の一群は楕円形もしくは隅丸長方形を、北西軸の一群は隅丸長方形を平面形の基本とし、規模は長軸約3.3m～5.5m前後、短軸2.5m～4.5m前後であった。柱穴は4本が一般的であったが、棟持柱と思われるビット2本を検出した住居跡もある。貯蔵穴周囲に周堤帯を認めた例もある。出土遺物は少なく、生

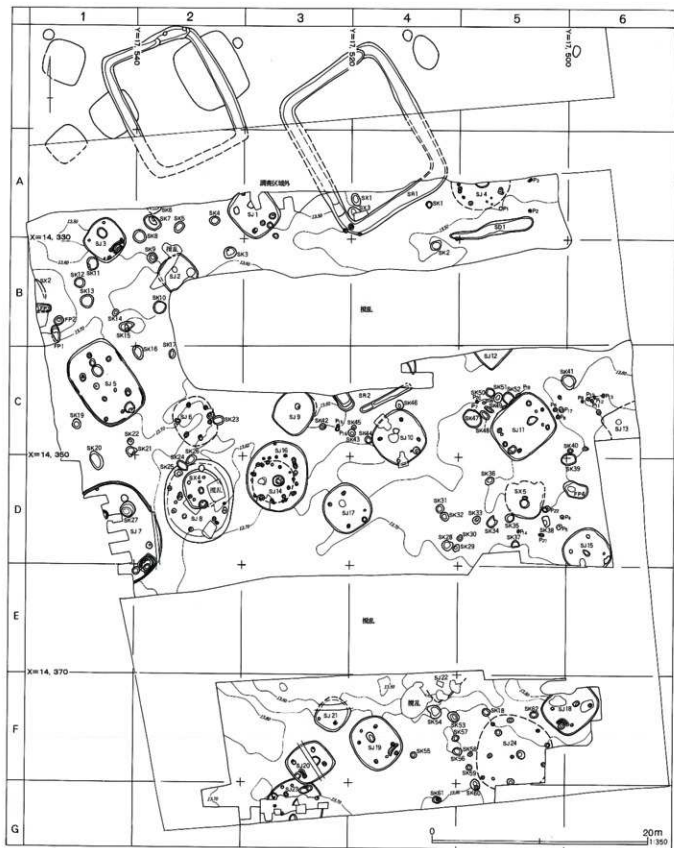
活時の状況を把握できた例はなかった。

住居跡出土遺物は、主に壺形土器と甕形土器で、双角有孔土製品3点も検出した。壺形土器には幅広い二重口縁のものと、折り返し口縁のものがある。ともに、頸部から肩部に斜縄文を施すものが一般的であるが、折り返し口縁のものでは、斜縄文の上端・下端にS字状結節文が入るもの、上端・下端をハケ状工具先端の連続押圧による沈線文、またはへら状工具による沈線文で区画するもの、口縁内面にS字状結節文をともなう斜縄文を施すもの、棒状浮文・円形浮文・円形朱文を付すもの、赤彩するもの等、加飾の傾向がある。二重口縁のものでは、S字状結節文をミガキやナデで消す傾向が認められる。装飾は、口縁に縄文を施すものが多く、ほとんどが棒状浮紋をともなっている。赤彩品は少ない。体部の調整は、ミガキ仕上げであるが、いずれもハケによる一次調整が行われている。甕形土器は、ほとんどが台付甕である。台付甕は多くがハケ調整で仕上げられており、いわゆるナデ甕は少ない。平底甕および小形の台付鉢は、ハケ調整後ナデ仕上げされているものが多いが、ナデに粗さが目立つものが

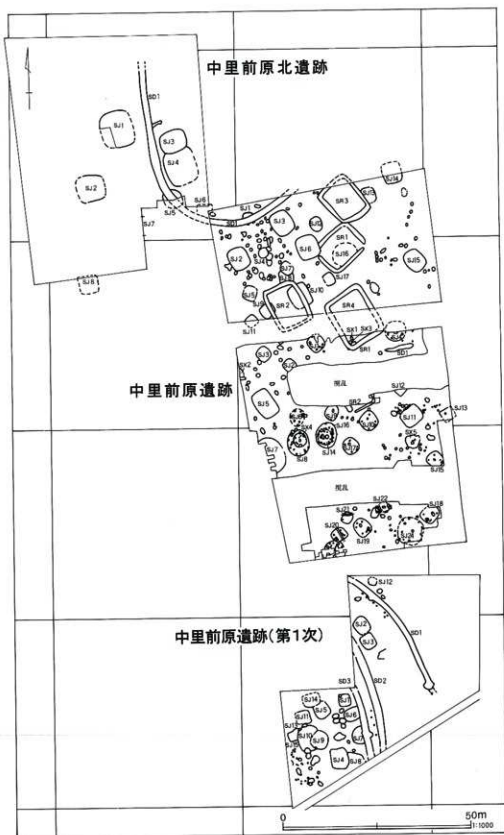
第5図 基本層序



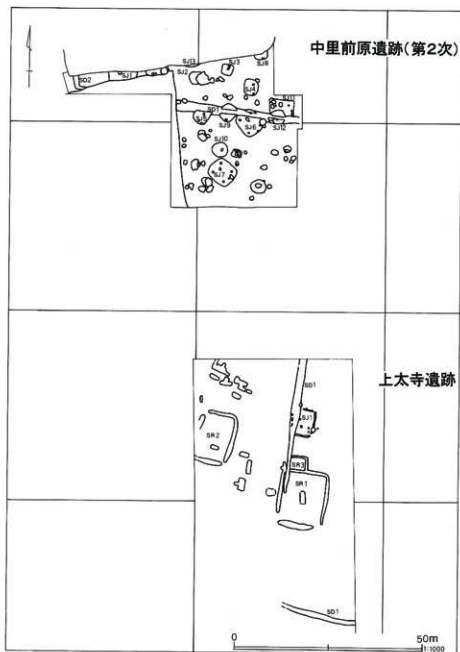
第 6 圖 中里前原遺跡全測圖



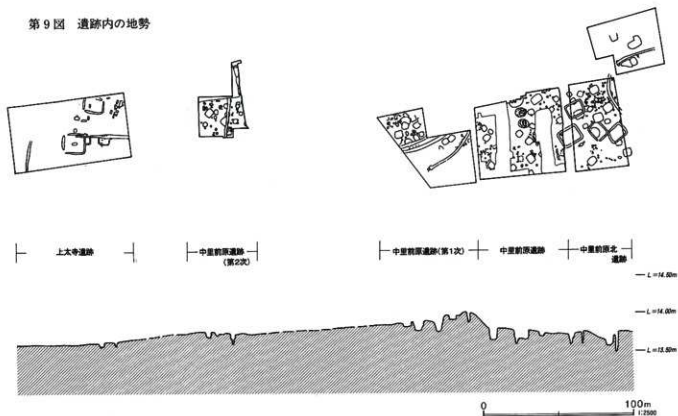
第7図 中里遺跡群遺構図(1)



第8図 中里遺跡群遺構図(2)



第9図 遺跡内の地勢



多い。赤彩品は多くない。

方形周溝墓は、長方形平面のもので、溝が全周するもの1基(SR1)と、溝の四隅が掘り残されて陸橋となるもの1基(SR2)を検出した。SR1は、前回当事業団で調査した中里前原北遺跡で検出したSR4の南半部である。周溝内から少量の弥生時代後期土器と銅鏝1点が出土した。SR2では、周溝内に、ほぼ完形の変形土器1点を検出した。

中里地区の遺跡群で調査された時期の明確な遺構の総数は、今回の調査を含め、縄文時代早期の住居跡2軒、同炉跡5基、中期の住居跡7軒、同土壇1基、弥生時代後期の住居跡63軒、同方形周溝墓9基、溝跡3条以上、古墳時代前期の住居跡1軒以上となった。

遺跡群は、住居跡と重複関係にある溝跡の存在によって、南北2つの環濠集落と、この間の遺構群(集落)からなると考えられるようになった。個々の遺跡範囲についても、近年ではこれを前提に想定されているようだ。しかし、遺跡群南部の上太寺遺跡に弥生時代後期の住居跡がみられないほかは、遺構・遺物とも

遺跡の内容に顕著な変化はない。

溝跡は重複する住居跡より新しいことがわかっており、現在のところ、南北ともに環濠集落としての具体的な構成は不明である。住居跡分布からは、環濠の内外の区別も明確ではない。また、南北約1,000m、東西150mとされている遺跡範囲のうち、内容がわかってるのは1/12程度である。

第9図は、各調査地点のソフトローム層上面の標高を北から南に追いかけてみたものだが、遺跡群中央付近でもっとも高くなっていることがわかる。先に迅速図から推定したように、本来の地勢は低地に迫り出した台地先端部と考えられる。最高点は南側環濠集落の環濠にあり、北側環濠集落の位置などを含め、地形的な条件がやや不安定であるといえよう。

本書では、こうした状況を踏まえ、中里地区の遺跡群を同一遺跡として把握し、2つの環濠集落の存在を前提にすることを控えておきたい。本書の「中里前原遺跡」の名称は、この範囲で用いている。

IV 遺構と遺物

1. 縄文時代

(1) 住居跡

第4号住居跡 (第10・11図)

A4・5グリッドで検出した。調査範囲北側限界にあたり、住居跡北半部は調査できなかった。

中央の炉跡を中心に、半径220cm程度の位置に不規則な配列のピット群を検出した。竪穴部の掘り込み、壁溝等は検出できなかった。覆土は炉跡周辺に遺存していた。焼土粒を含む暗褐色土であった。中央部以外では、確認面の直上に、現代建築物による擾乱層が接する部分もあり、削平によって上部が失われたものと思われる。

炉跡はピット群の中央で検出した。地床炉であった。東西130cm程度の楕円形にロームを掘り窪めた後、暗褐色土を基層に設置したもので、西から70cm程度の範囲が熱を受けて赤化していた。

ピットは11基検出した。それぞれ、床面からの深さは、P1が12cm、P2が15cm、P3が11cm、P4が

7cm、P5が60cm、P6が17cm、P7が11cm、P8が19cm、P9が54cm、P10が50cm、P11が58cmであった。いずれも柱痕跡は認められなかったが、P10・P11は形状・深さからみて柱穴と考えてよいだろう。その他のピットも、覆土にP10・P11と差がないことから、上層構築材の一部を受けたものと考えられる。

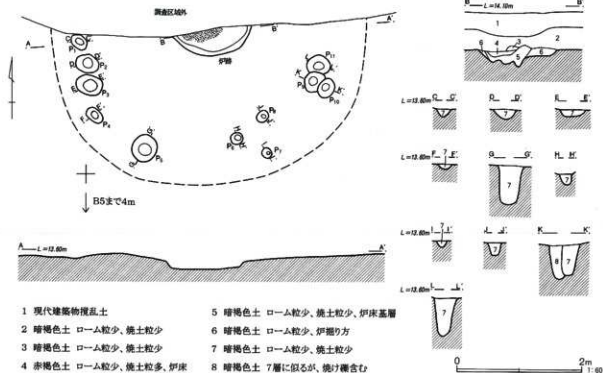
出入り口等の施設は検出できなかった。

出土遺物は、炉跡および周辺の覆土中から、少量の土器と石器を得ることができた。炉跡出土土器では、深鉢形土器2個体が復元できた。

出土土器は、中期後葉の土器群が主体である。

1は加曾利E系キャリバー形の深鉢形土器で、口径は24cm前後と推定できる。口縁部から胴部上半の1/5程度が残存している。口縁部がやや内湾しながら直線的に開き、頸部には弱い段がある。口縁部文様帯は、隆帯+沈線で描いた渦巻文と楕円区画文を交互に配置

第10図 第4号住居跡



する。胴部には、平行沈線による懸垂文が垂下する。沈線間は磨り消されている。地文は縦位回転の単節RL縄文である。

2は深鉢形土器底部で、底径6.3cmである。底部付近の2/3程度が残存している。平行沈線による懸垂文が認められる。

3～5は、深鉢形土器胴部片である。平行沈線による懸垂文が垂下し、沈線間は磨り消されている。地文は縦位回転の単節RL縄文である。

2～5については、接点はないが、文様・胎土が類似しており、1と同一個体と考えられる。

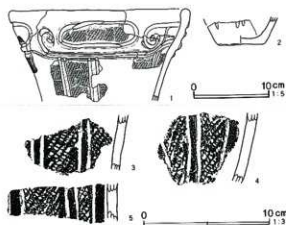
6は石皿である。表裏面に窪みがあるが、表面のものは、破損後の使用によるものである。安山岩製で、長さ12.4cm、幅7.2cm、厚さ3.9cm、重さ302.4gである。

第8号住居跡（第12～15区）

D2グリッドで検出した。時期不明のSX4と重複するが、平面および断面観察から、当住居跡がSX4に遅れるものと判断した。

南北に長い楕円形の内周付近に並ぶピット群と、中央から南に寄った位置に炉跡、南西に寄った位置に埋嚢を検出した。覆土は住居跡中央部付近に遺存していた。焼土粒を含む暗褐色土であった。竪穴部の掘り込み、壁溝等は検出できなかったが、住居跡部分はすり

第11図 第4号住居跡出土遺物



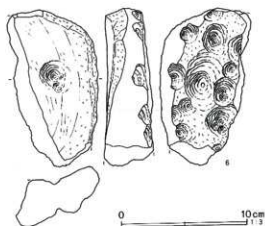
鉢状に窪んでおり、本来、竪穴部の掘り込みがあったことが推測できる。破線で図示した範囲は、窪みから復元した竪穴部の範囲である。およその規模は、南北7.50m、東西6.35m程度となる。

ピットは15基検出した。深さ50cm以上の大形のもの、窪み周辺部に6基、この内側、半径450cm程度の円周上にやや浅いもの8基が、配置されていた。なお、P15はやや浅いものの、外周部の大形のピットと同じ円周上にのるものであった。床面からの深さは、P1が69cm、P2が73cm、P3が13cm、P4が15cm、P5が6cm、P6が62cm、P7が15cm、P8が76cm、P9が38cm、P10が25cm、P11が46cm、P12が21cm、P13が13cm、P14が66cm、P15が32cmであった。いずれも柱痕跡は認められなかったが、P1・2・6・8・11・14は深さからみて主柱穴と考えてよいだろう。また、P15覆土中のロームブロックを柱埋設土が遺存したものと考えれば、配置からみて、主柱穴に含めてよいと思われる。

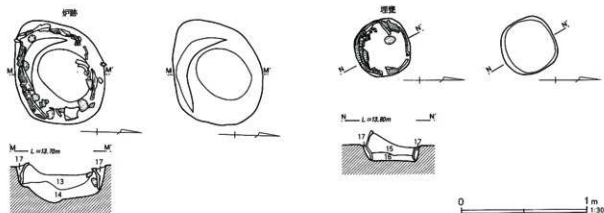
主柱穴の位置、柱の埋設を繰り返したことを窺わせるP1やP10等の形状、P10～13の位置関係からみて、西側に拡張して上屋を建替えた可能性がある。

P1・P8間を主軸と考えると、方位はN-9°-Eとなる。

炉跡は、内側のピット群に囲まれる範囲の中央南よりの位置で検出した。埋嚢と同一個体の大形深鉢形土



第13図 第8号住居跡炉跡および埋壘



器口縁部付近を用い、間隙に小形の川原石を充填した埋壘炉であった。長軸92cm、短軸71cm、深さ29cmの掘り込みに、第14図1の深鉢形土器上半部を正位に設置していた。炉体土器は、口縁が2/3程度残存していたが、接合しない部分が壊し、あるいは重なって設置されており、破損後大形破片を中心に、任意の位置に配置したものとしてよいだろう。壘および土器の内面は赤化していた。炉跡覆土は、住居跡埋没土が流入したものであった。

埋壘は、炉跡よりも南西部に寄った位置に設置されていた。炉体土器と同一個体の深鉢形土器胴部下半を、径40cm前後、深さ15cm前後の掘り込みに、逆位に設置したものであった。土器表面の亀裂や土圧による破損がみられたが、原型を保っており、上部を割り取った状態で用いたものであろう。

出入り口等の施設は検出できなかった。

出土遺物は、埋壘炉・埋壘に用いた大形深鉢形土器以外では、炉跡覆土および炉跡周辺を中心に、少量の土器片を検出した。中期後葉の土器群である。

1は加曾利E系キャリバー形の深鉢形土器で、口径は56cm前後である。胴部上半の水平な割れ口から上部が炉体土器として、下部が埋壘として用いられていた。口縁の1/2、胴部の1/3程度を欠く。口縁部がやや内湾しながら開き、頸部には明瞭な段がある。口縁部文様帯は、区画内に隆帯+沈線を描いた入り組み状の渦巻文を6単位配置するが、1単位が円形文となっ

ている。胴部には、平行沈線による懸垂文と沈線による蛇行懸垂文が交互に、各5単位垂下する。沈線間は、沈線施文時の胎土の盛り上がりによって、地文が消えているが、磨り消されてはいない。地文は縦位回転の燃系Lで、隆帯貼り付け前に口縁から、連続的に施文している。

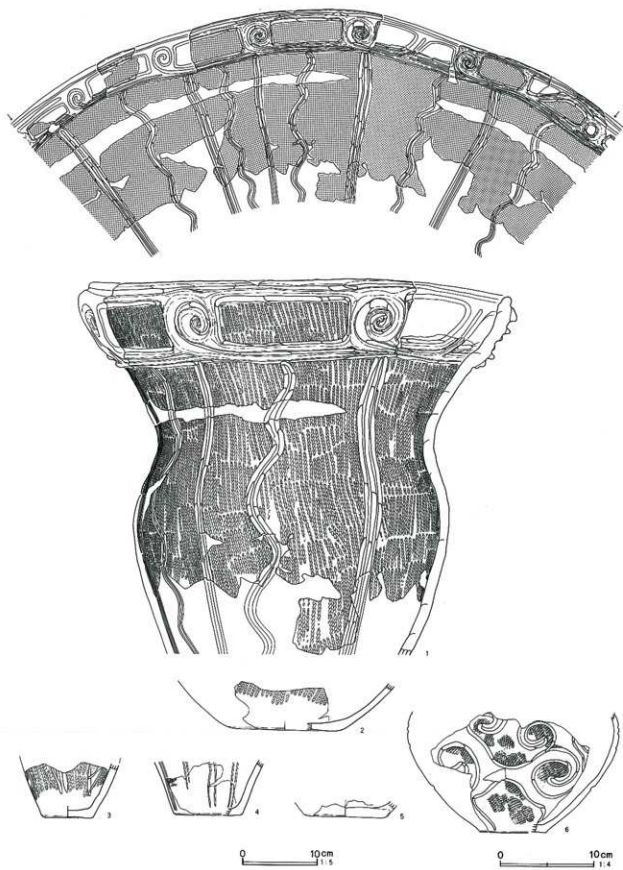
2は深鉢形土器底部で、底径約13.5cmである。底部付近の1/5程度が残存している。文様構成・胎土ともに1に類似しており、同一個体と考えられる。埋壘覆土から出土した。

3～5は、深鉢形土器胴部下半および底部片である。3は、3本1対の平行沈線による懸垂文が垂下する。沈線間は磨り消されている。地文は縦位回転の燃系Lである。底径7.0cmである。炉跡覆土から出土した。4は、平行沈線による懸垂文が垂下する。沈線間は磨り消されている。地文は縦位回転の単節R L縄文である。底径9.3cmである。覆土中から出土した。5は底部片で、底径10.5cm程度であろう。覆土中から出土した。

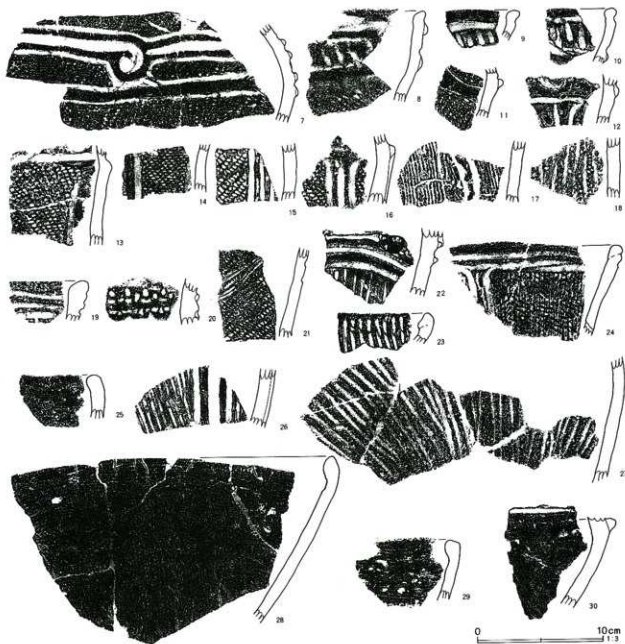
6は浅鉢形土器である。胴部に連結した沈線による渦巻文が施される。地文は縦位回転の単節R L縄文で、沈線間は磨り消される。炉跡覆土から出土した。

7～18は、加曾利E系キャリバー形の深鉢形土器である。7は隆帯+沈線による入り組み状の渦巻文が施される。地文は縦位回転の単節R L縄文である。8～10は、口縁部文様帯に縦位の沈線が施されている。11は、口縁部文様帯に隆帯による繫弧文を施すものと思われる

第14图 第8号住居跡出土遺物(1)



第15図 第8号住居跡出土遺物(2)



る。地文は縦位回転の単節LR縄文である。12は口縁部文様帯に隆帯+沈線による渦巻文をもち、頸部に弱い段がつく。渦巻文下には平行沈線による懸垂文が垂下する。地文は縦位回転の単節LR縄文で、沈線間は磨り消されている。13~15は、胴部に平行沈線による懸垂文が垂下する。沈線間は磨り消されている。16は隆帯による懸垂文が垂下する。17は平行沈線による蛇行懸垂文が垂下する。地文は撚糸Rである。18は風化が著しく、器面が荒れているが、単節RL縄文に撚糸

Lを絡げた付加条と思われる地文を施す胴部片である。

19~21は連弧文系の土器である。19は口縁部下に3条の沈線が入る。20は連弧文系土器の頸部くびれ部付近である。交互刺突のある2条の沈線が2段に施されている。21は、2本沈線による連弧文が施される深鉢形土器胴部片である。

22は、波状口縁の深鉢形土器である。波頂部下に隆帯による渦巻文が貼付され、2条の隆帯下は、沈線が縦位に施される。

23は管利式系の深鉢形土器口縁部である。半裁竹管状工具による重弧文が描かれる。

24は、コップ形に開く深鉢形土器である。口縁部直下に2条の沈線がめぐり、平行沈線による懸垂文が垂下する。地文は燃糸Rである。

25は、無文口縁の深鉢形土器片である。

26・27は、半裁竹管状工具による縦位の集合沈線が施される深鉢形土器胴部片である。26は2条の隆帯による懸垂文が施されている。

28～30は浅鉢形土器である。28・29とも、内外面がよく磨かれており、口縁内部にはヘラ状工具の角を利用した窪みかめぐる。30は隆帯+沈線によって区画された胴部上半に、文様帯をもつと考えられる。

なお、拓本で示した土器は、22がP7から、8・10・13～17・20・24～30が埴野土から、7・21が埋襲覆土から、他は住居跡覆土から出土した。

第14・第16号住居跡（第16・17図）

C3・D2グリッドで検出した。2基の炉跡と2つの円周上に配置されたビット群を検出したことから、2軒の住居跡の重複と判断した。

覆土は、竪穴部掘り込みに遺存していた。焼土粒・炭化物を少量含む暗褐色土であった。

ビットは30基検出した。ビット群は、径4.2m程度の円周上に並ぶ一群と径3.2m程度の円周上に並ぶ一群とに分けられる。ビット群が重複する部分では、帰属関係を明確にすることはできなかったが、より深いビットをもつものが、大形の住居跡を構成するものと考えられた。それぞれのビット群の描く円周中央には、地床炉と石囲炉が設置されていた。

調査時点では、小形の円周を描くビット群と中央の地床炉をもって第14号住居跡、大形の円周を描くビット群と中央の石囲炉をもって第16号住居跡と呼称することにし、本書もこれにしたがった。住居跡の先後関係も、推定の範囲におけるビット覆土の断面観察から、第14号住居跡が、第16号住居跡に先行するものと判断した。

ビット群のうち、第14号住居跡にともなうと推定したのは9基である。柱痕跡は検出できなかった。覆土は、ロームブロックを含むものがあるほか、炭化物・焼土等を混入する暗褐色土で、第16号住居跡に帰属すると考えたものと類似していた。床面からの深さは、P1が14cm、P2が14cm、P3が12cm、P4が10cm、P5が16cm、P6が8cm、P7が8cm、P8が11cm、P9が9cmであった。いずれも一定していたが、明確に柱穴と判断できる材料はなかった。垂木など上屋構築材埋設跡かも知れない。

ビット群分布範囲のおよその規模は、長軸となる東西で3.70m、南北で3.30m程度となる。長軸上にあるP1・P5間の方位はN-71°-Wである。

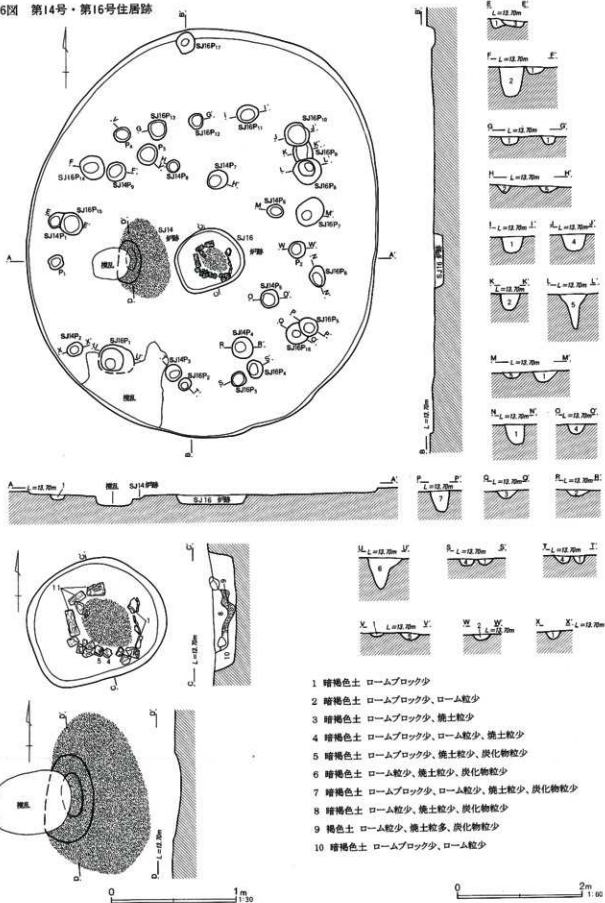
第14号住居跡にともなう炉跡は、ビット群の円周中央やや西寄りの位置で検出した。西側を現代建築物によって攪乱されていたが、南北70cm、東西35cm程度の範囲を深さ5cmの楕円形に掘り窪めており、この掘り込みから東側に向かい、南北125cm、東西80cm程度の範囲に焼土粒が分布していた。

埋襲、出入り口等の施設は検出できなかった。

その他のビット群については、第16号住居跡にともなうものとして調査した。いずれも、柱痕跡は検出できなかった。覆土は、ロームブロック・炭化物・焼土等を混入する暗褐色土であった。床面からの深さは、P1が50cm、P2が12cm、P3が10cm、P4が9cm、P5が31cm、P6が32cm、P7が16cm、P8が54cm、P9が27cm、P10が25cm、P11が23cm、P12が10cm、P13が12cm、P14が46cm、P15が10cm、P16が10cm、P17が6cmであった。深さは、30～50cm前後のもの10cm前後のものがあった。30～50cm前後のものは、中央の炉跡を中心に、直交する2本の軸近くに配置されており、主柱穴と考えてよいだろう。その他のものについては、柱穴と断定できる材料はなかった。垂木など上屋構築材埋設跡の可能性はある。なお、P17については、当住居跡にともなわないかも知れない。

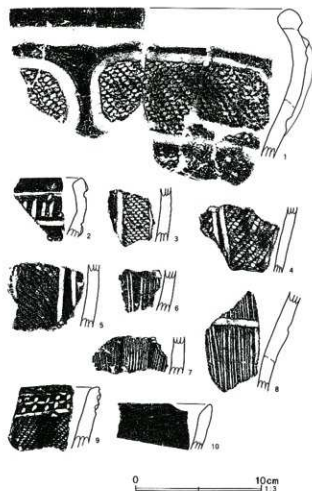
およその規模は、長軸となるP1・P8間で4.50m、短軸となるP5・P14間で4.30m程度である。長軸の

第16図 第14号・第16号住居跡



- 1 暗褐色土 ロームブロック少
- 2 暗褐色土 ロームブロック少、ローム粒少
- 3 暗褐色土 ロームブロック少、焼土粒少
- 4 暗褐色土 ロームブロック少、ローム粒少、焼土粒少
- 5 暗褐色土 ロームブロック少、焼土粒少、炭化物粒少
- 6 暗褐色土 ローム粒少、焼土粒少、炭化物粒少
- 7 暗褐色土 ロームブロック少、ローム粒少、焼土粒少、炭化物粒少
- 8 暗褐色土 ローム粒少、焼土粒少、炭化物粒少
- 9 褐色土 ローム粒少、焼土粒多、炭化物粒少
- 10 暗褐色土 ロームブロック少、ローム粒少

第17図 第14号・第16号住居跡出土遺物

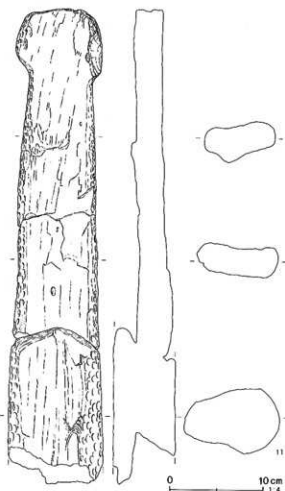


方位はN-49°Eである。また、竪穴部の掘り込みは、ビット群より北東側に広がっており、第16号住居跡にともなうものと考えられる。規模は南北6.45m、東西5.62mであった。

第16号住居跡の炉跡は、ビット群の円周のほぼ中央で検出した。長径110cm、短径95cm、深さ19cm程度の掘り込みを暗褐色土で埋め戻して基層とし、小形の川原石と、第17図11の折損した緑泥片岩製の石棒を設置した石囲炉であった。石材は3辺に設置されており、残る1辺には、第17図1の深鉢形土器口縁部を用いていた。内面は明瞭に赤化していた。基層によるか味面は深さ9cmほどで、焼土化していた。覆土は竪穴部掘り込みと共通しており、流入土と考えられる。

埋塞、出入り口等の施設は検出できなかった。

出土遺物は、各住居跡の炉跡覆土を中心に少量の土



器片と石器が出土した。2・4・6・8・9・10・12が第14号住居跡炉跡から、1・13が第16号住居跡炉体として、その他は第16号住居跡竪穴部覆土中から出土した。主に中期後葉の土器群である。

1・2は、加曾利E系キャリバー形の深鉢形土器口縁部片である。1は、第16号住居跡炉体の1辺として検出したものである。口縁部文様帯に隆帯+沈線による楕円区画文がめぐる。地文は縦位回転の複節LRL縄文である。

2は、隆帯+沈線による区画内に半截竹管状工具による縦位の沈線が施される。

3～5は、平行沈線による懸垂文をもつ深鉢形土器胴部片である。いずれも沈線間は磨り消されている。

3は縦位回転の複節LRL縄文を、4は縦位回転の単節RL縄文を、5は縦位回転の無節L縄文を地文と

する。

6～8は、条線を施す胴部片である。いずれも櫛歯状工具によって施文されている。

9は、半截竹管状工具による交互刺突をともなう3条の平行沈線がめぐる深鉢形土器口縁部片である。連弧文系土器群であろう。

10は無文浅鉢形土器の口縁部片であろう。

11は、第16号住居跡が体に用いられていた石棒である。顕著に被熱しており、全体が3片に、さらに基部が2片に割れていた。先端から2/3程度までは、表裏面とも被熱前に剥離している。現存長50.2cm、幅10.1cm、最大厚6.6cm、重さ3912.84gである。

第23号住居跡 (第18・19図)

F3・G3グリッドで検出した。弥生時代の第20号住居跡と重複するが、覆土の平面観察から、当住居跡が第20号住居跡に先行するものと判断した。

調査範囲南側境界にあたり、住居跡南半部およびシートパイル控え部分は調査できなかった。住居跡中央部には、東西方向に現代建築物による擾乱が入り、炉跡の大部分等が破壊されていた。

検出したのは、南北に長い楕円形の竈穴部掘り込みと、内部中央付近の炉跡、内部の壁際を中心に配置されたピット群である。

竈穴部の覆土は、ロームブロック・焼土粒を含む暗褐色土で、層厚10cm程度が遺存していた。竈穴部の規模は、東西5m程度であろう。

壁溝・埋塞等の施設は検出できなかった。

ピットは竈穴部壁際を中心に、10基検出した。床面からの深さは、P1が28cm、P2が23cm、P3が33cm、P4が16cm、P5が43cm、P6が24cm、P7が8cm、P8が27cm、P9が39cm、P10が6cmであった。

ピットの覆土はローム粒・焼土粒を含む暗褐色土で、柱痕跡は認められなかったが、P4・P6・P7・P11を除く壁際のピットは、同一円周上に規則的に配列されており、断面の形状からみて柱穴と考えてよいだろう。ただし主柱穴と考えられるピットはなかった。

P7は、入り口関連施設の可能性もある。擾乱の南では、ピットは検出できなかった。

P3・P4・P9は、焼土層を切って掘り込まれていた。焼土層が当住居跡にともなうものであるか否かについては、判断できなかった。

炉跡は、円周上に並ぶピット群の中央やや東寄りの位置に検出した。現代建築物による擾乱のため大部分を破壊されていたが、1/4程度が遺存していた。地山ローム層を楕円形に掘り窪めた地床炉であった。覆土は、上層が竈穴部覆土の流入土、下層がロームブロックを含む層で、炉床構築土と思われる。底面中央が赤化しており、周囲に炭化物が堆積していた。床面からの深さは12cm程度であった。

出土遺物は、中央の擾乱を除く床面から、少量の土器片と石器が得られた。大形破片は擾乱南側に集中しており、小破片の多くは擾乱中に流入していた。

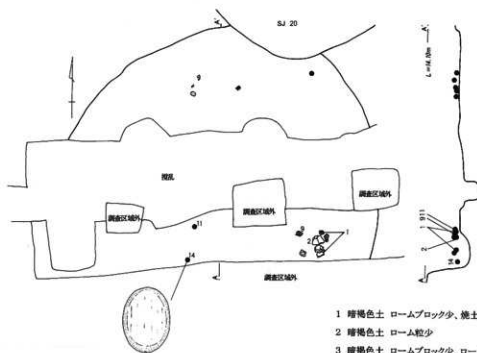
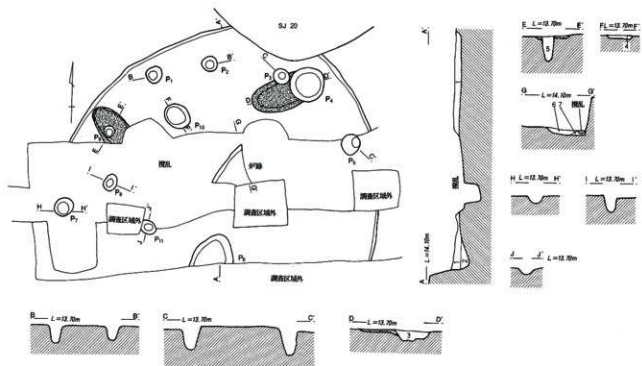
出土土器は、中期後葉の土器群が主体である。

1は、加曾利E系キャリバー形の深鉢形土器大形破片である。口径は26cm前後である。底径は6.4cmである。図示部位の各々1/3程度が残存する。胴部以上と底部に接点はないが、胎土・焼成状況から同一個体と判断した。口縁は若干内湾ぎみに立ち上り、頸部に段がある。括れはやや強い。口縁部文様帯は、隆帯+沈線による楕円区画文が7あるいは8単位めぐる。胴部は平行沈線による懸垂文が14～15単位垂下する。沈線間は磨り消されている。地文は縦位回転の単節RL縄文である。

2は、加曾利E系キャリバー形の深鉢形土器大形破片である。胴下半を欠く。口縁部は波状部が大きく内湾する。括れは弱い。4単位の波状口縁と思われ、波頂下に円孔があく。口縁部文様帯は、沈線による入り組み状の渦巻文と楕円区画文を基本にしたものと思われる。胴部には、平行沈線による懸垂文が9～10単位垂下する。地文は縦位回転の懸垂Lである。

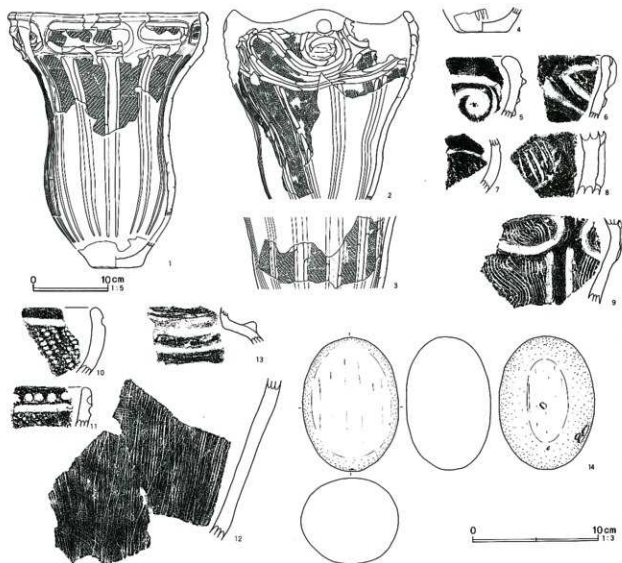
3は深鉢形土器胴部片である。平行沈線による懸垂文が垂下する。沈線間は磨り消されている。地文は、縦位回転の単節LR縄文である。

第18図 第23号住居跡および遺物出土状況



- 1 暗褐色土 ロームブロック少、焼土粒少
- 2 暗褐色土 ローム粒少
- 3 暗褐色土 ロームブロック少、ローム粒少、焼土ブロック少、焼土粒少
- 4 暗褐色土 ローム粒少、焼土粒少
- 5 暗褐色土 ローム粒少、焼土粒少
- 6 暗褐色土 ローム粒少、焼土粒少
- 7 暗褐色土 ロームブロック少、ローム粒少、焼土粒少

0 2m
1:60



4は深鉢形土器底部片である。平行沈線による懸垂文が垂下する。

5～10は、キャリパー形の深鉢形土器口縁部片である。

5は隆帯+沈線による渦巻文が施される。6は緩やかな波状口縁もしくは低い突起がつくものであろう。7は沈線による楕円区画文が施される。地文は縦位回転の単節LR縄文である。8は、隆帯による楕円区画文内に半截竹管状工具による縦位の沈線が施される。9は、口縁部区画内に隆帯+沈線による楕円区画文が、胴部に平行沈線による懸垂文が施される。地文は、楕

歯状工具による条線である。10は、地文に縦位回転の複節LRLが施される。

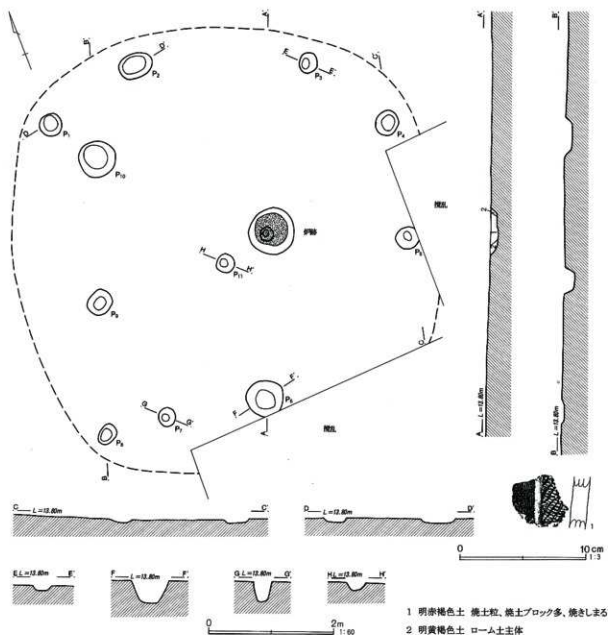
11は連弧文系の深鉢形土器口縁部であろう。口唇部直下に連続刺突文と沈線がめぐり、地文は縦位回転の単節LR縄文である。

13は、有孔銅付土器である。器面はよく磨かれていゝる。無文の口縁が立ち上ると思われる。

12は、櫛歯状工具による条線が施される深鉢形土器胴部片である。

14は、閃緑岩製の磨石である。長さ11.5cm、幅7.6cm、厚さ6.7cm、重さ820.01gである。

第20図 第24号住居跡および出土遺物



第24号住居跡 (第20図)

F 5グリッドで検出した。現地調査では炉跡を把握していたが、周囲のピット群を土壌と認識し、丸掘りしてしまったため、報告書作成作業の段階で、ピット群の配列を整理した。調査範囲南側限界にあたり、南東側の一部は調査できなかった。

ピット群の配置から想定できる住居跡の規模は、南北7.0m、東西6.6m程度である。

竪穴部の掘り込み・壁溝・埋装等は検出できず、覆

土についても炉跡を除いて確認しなかった。

ピットは、炉跡西側付近を中心にして半径2.5m程度の円周上に検出した10基について、当住居跡にともなうものと判断した。床面からの深さは、P 1が4cm、P 2が4cm、P 3が6cm、P 4が4cm、P 5が4cm、P 6が28cm、P 7が32cm、P 8が3cm、P 9が12cm、P 10が8cmであった。主柱穴と考えられるのはP 6・P 7であるが、主柱穴の配列については明らかにできなかった。その他のピットについても明瞭に柱穴と判

断できるものではなく、垂木等の上層構造に関わる可能性がある。

炉跡は、円周上に並ぶピット群の中央やや東寄りの位置に検出した。地山ローム層を、平面円形深さ14cm程度に掘り窪め、ローム主体の基層で埋め戻した地床炉であった。覆土はなく、上層は焼きしまった焼土層で、炉床面が露出していた。

炉床が露出した炉跡の状況からみて、遺構構築面か

(2) 炉穴

第1号炉穴 (第21図)

第2・3号炉穴と隣接して、B1グリッドで検出した。長楕円形平面で、底面は平坦であった。壁面は急傾斜で立ち上っていた。底面に焼土化した炉床が認められたことから炉穴と判断した。

調査範囲西側限界にあたり、被熱痕跡の1/2程度を含む西端部が調査できなかった。また、南辺は現代建築物による擾乱のため、破壊されていた。調査範囲にかかった部分で長さ136cm、幅は80cm前後、深さ38cmであった。

出土物はなかったが、B1グリッドでは縄文時代第21図 炉 穴

ら床面にかけて削平されていると考えられ、ピットの遺存状況も下部中心であったと思われる。

出土物は、炉跡覆土中から中期後葉の土器片を得ることができた。

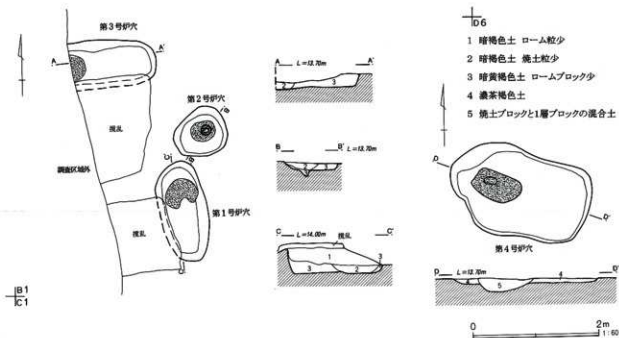
1は、加曾利E系キリバー形-形の深鉢形土器胴部片と考えられる。平行沈線による懸垂文が垂下する。地文は縦位回転の単筋RL縄文で、沈線間は磨り消されている。

早期末の土器群が出土しており、従来の調査成果および当遺構の形状等からみて、早期末頃の炉穴と考えてよいだろう。

第2号炉穴 (第21図)

第1・3号炉穴と隣接して、B1グリッドで検出した。不正な円形平面をなし、底面はほぼ平坦であったが、焼土分布範囲中央にはピット状の窪みがあった。壁面は傾斜していた。底面に焼土化した炉床が認められたことから炉穴と判断した。

径75~88cm、深さは底面で10cm、窪み部分で21cmで



あった。

出土遺物はなかった。第1号炉穴同様、早期末頃のものと考えられる。

第3号炉穴（第21図）

第1・2号炉穴と隣接して、B1グリッドで検出した。不正な長楕円形平面で、底面はほぼ平坦であった。壁面は急傾斜で立ち上っていた。底面に焼土化した炉床が認められたことから炉穴と判断した。

西辺から南辺にかけて現代建築物による擾乱のため、破壊されていた。推定できる長さ160cm前後、幅75cm前後、深さ19cmであった。

出土遺物はなかった。第1・2号炉穴同様、早期末

(3) グリッド出土遺物

調査区全般から、縄文時代早期～後期中葉の土器群が出土した。

図上復元できたのは、1・2の2個体で、ともに中期後葉の深鉢形土器底部片である。1は縦方向によく磨かれている。底径は6.9cmである。2はヘラ状工具による粗い調整後、縦位回転の単節LR縄文が施される。底径は7.4cmである。ともにD1グリッドで出土した。

3～5は条痕文系土器群である。3・4は口縁部片で、胎土に少量の繊維を含む。野鳥式と思われる。3は、口唇部に絡状体圧痕を施す。外面には明瞭な条痕を施し、内面には封筒状の条痕による整形痕がある。B1グリッドから出土した。4は、口唇部に棒状工具によるキザミが施され、内外面とも擦痕状の整形痕がこのころ。C1グリッドから出土した。

5は、多量の繊維を含み、脆弱な胎土が特徴である。外面には貝殻背圧痕文が施される。早期末～前期初頭の花積下層式と思われる。D2グリッドから出土した。

6は前期の諾磯b式土器である。地文の単節RL縄文の上に、半裁竹管状工具による沈線文が施される。D2グリッドから出土した。

遺構外出土遺物の主体を占めるのは、中期後葉の土器群であった。

頃のものと考えられる。

第4号炉穴（第21図）

D5・6グリッドで検出した。不正な長楕円形平面をなし、底面は平坦であったが、焼土分布範囲下がすり鉢状に窪んでいた。壁面は上部を削平されており、底面近くの緩傾斜部分が遺存していた。底面に焼土化した炉床が認められたことから炉穴と判断した。

長さ229cm前後、幅143cm前後、深さは底面で8cm、窪み部分で20cmであった。

出土遺物はなかったが、従来の調査成果および形状等から、早期末頃のものと考えられる。

7～33は、加曾利E系の深鉢形土器片である。

7～10は、口縁部文様帯に隆帯+沈線による渦巻文と楕円区画文を交互に配置している。7の地文は、縦位回転の単節RL縄文である。10は口縁部文様帯下部の区画をもたない。7・9はD3グリッド、8はD1グリッド、10はC3グリッドから、それぞれ出土した。

11～17は、口縁部文様帯に楕円区画文をもつ。すべて隆帯+沈線で描出している。17は、楕円区画内に半裁竹管状工具による集合沈線を施文している。11はC1グリッドから、12はG4グリッドから、13はC4グリッドから、14はB2グリッドから、15・16はD2グリッドから、17はC4グリッドから出土した。

18～20は頸部片である。18は2条の隆帯によって区画される大形の深鉢形土器である。19は弧状に連続する沈線によって楕円区画文が描出されると思われる。20は隆帯と沈線によって区画されている。18はC4グリッド、19・20はD1グリッドの出土である。

21～33は胴部片である。21・22は隆帯と沈線による懸垂文が施されている。21の地文は、縦位回転の複節RLR縄文である。23～27は2条の、28・29は3条以上の平行沈線による懸垂文が垂下する。沈線間はいずれも磨り消されている。30は平行沈線による懸垂文

第22図 縄文時代グリッド出土遺物(1)



が施されるものだが、懸垂文を構成する沈線の単位が不明である。31は、3条の平行沈線による懸垂文が垂下するが、磨り消しが交互に行われている。地文は縦位回転の無節R縄文である。32は隆帯による蛇行懸垂文が施されている。地文は縦位回転の単節RL縄文である。33は、縦位回転の単節LR縄文を地文とする胴部片である。21・23・32がD1グリッド、22・33がC4グリッド、24がG3グリッド、25・30がA3グリッド、26・27がC1グリッド、29がC5グリッド、31がB2グリッドから出土した。

34は小形の深鉢形土器と思われる。口縁下に沈線がめぐり、地文は縦位回転の単節LR縄文である。C5グリッドで出土した。35は無文の口縁部である。C4グリッドで出土した。

36～41は連弧文系土器群である。

36は棒状工具で、37は半載竹管状工具で、38は竹管状工具で加えた交互刺突と沈線を、口縁部にめぐらせている。39は、口縁部下に連続刺突文をともなう2条の平行沈線をめぐらし、括れ付近には沈線による連弧文を施す。40・41は胴部の括れに平行沈線を施すもので、櫛歯状工具による縦位の条線を地文とする。36はF3グリッドで、37はD1グリッドで、38はD2グリッドで、39はD3グリッドで、40・41はC4グリッドで出土した。

42～46は曾利系土器群である。

42は沈線による重弧文が、43・44は斜行する集合半隆起線文が、口縁部に描出されている。45・46は胴部の括れ付近で、波状の浮線文がめぐり、45は半載竹管状工具による集合沈線、46は櫛歯状工具による条線が地文である。42・44・46はC4グリッドで、43はD3グリッドで、45はD1グリッドで出土した。

47～50は縦位の条線が施される胴部片である。48は隆帯+沈線の懸垂文が、括れ部の貼付け文から垂下する。49・50は隆帯+沈線による蛇行懸垂文が垂下する。50の蛇行は緩やかである。47がF4、他はC4グリッドで出土した。

51～55は浅鉢形土器である。51は口縁部に区画文帯

をもつ。区画内は縦位の沈線が施されている。内面は磨かれているが、外面は削り調整されている。52は口唇部に沈線がめぐり、内面はミガキがよく遺存している。53・54は無文の浅鉢形土器である。53は、口縁部が内側にくの字に屈曲する。内外面ともよく磨かれている。54は、内外面がよくミガかれているが、外面は風化によって器面が荒れている。口縁は緩やかに屈曲しており、内部にはヘラ状工具の角を利用した窪みがめぐり、51はA5グリッド、52・53はC4グリッド、54はF4グリッド、55はD2グリッドから出土した。

56～61は後期前葉の壺之内式にあたる土器群である。

56は、やや強く外反する深鉢形土器口縁部である。口唇部には渦巻文のある突起が付き、2条の沈線がめぐり、文様帯は、上下を2条の平行沈線で区画し、内部に鋸歯状の沈線区画をめぐらせ、集合沈線によって充填している。D3グリッドで出土した。57は小波状口縁波頂部外面に盲孔をもつ円形貼付文が施され、口縁端部には沈線がめぐり、G4グリッドで出土した。58は直線的に外反し、端部を内屈する波状口縁部である。文様帯は口縁部文様帯、および胴部に平行沈線をめぐらせ、両区画間にX字状の区画文や三角形区画文等を描出するものと思われる。沈線間は、縦位回転の単節RL縄文で充填している。C1グリッドで出土した。59は外反する口縁部下にめぐり条線文で文様帯上部を区画し、条線による分割線を垂下させ、鋸歯状につなぐものであろう。60・61は、口縁部下と思われる。60は条線、61は沈線がめぐり、59はD3グリッドで、60はC5グリッドで、61はC1グリッドで出土した。

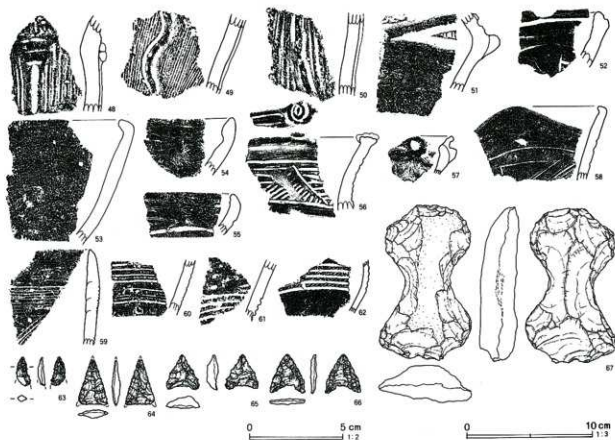
後期中葉の資料も少量ながら出土した。

62は横位回転の単節LR縄文上に、平行沈線文を施す鉢形土器片である。C5グリッドで出土した。

63～66は石鏡である。

63は黒曜石製で、現存する長さ1.49cm、幅0.73cm、厚さ0.33cm、重さ0.32gである。D1グリッドで出土した。64は長い二等辺三角形状で、黒曜石製である。

第23図 縄文時代グリッド出土遺物(2)



基部端部を欠くが、現存する長さ2.37cm、幅1.61cm、厚さ0.42cm、重さ1.08gである。G4グリッドで出土した。65・66は基部に抉りが入っている。65はチャート製で、長さ1.86cm、幅1.78cm、厚さ0.61cm、重さ1.50gである。F5グリッドで出土した。66は黒曜石製

で、長さ2.03cm、幅1.89cm、厚さ0.32cm、重さ0.87gである。D3グリッドで出土した。

67は分銅形の打製石斧である。粘板岩製で、長さ12.2cm、幅7.3cm、厚さ2.8cm、重さ265.07gである。F4グリッドで出土した。

2. 弥生時代

(1) 住居跡

第1号住居跡 (第24・25図)

A2・3グリッドで検出した竪穴住居跡である。北側調査範囲限界にあたり、住居跡北東角およびシートパイル控え部分は調査できなかった。

平面形は北西—南東方向に長い隅丸長方形であった。規模は長軸方向4.55m、短軸方向4.20m、深さ0.52m、長軸方位はN-50°-Wであった。

覆土は、主に焼土・炭化物を含む単層の堆積であった。含有されていたパミスの起源は、明らかにできなかった。壁際には、ロームブロックを含む壁面からの崩落土と思われる堆積があった。

壁面は傾斜しており、壁面上端が崩落したものと考えられる。壁溝は確認できなかった。

柱痕跡もしくは埋設土の遺る柱穴は3本確認した。調査範囲外となった北側のシートパイル控え部分には、未発見の柱穴が存在するものと予想できるが、今回確認することはできなかった。P1では柱材が腐食して空洞化した部分に柱埋設土のロームブロックが崩落していた。P2・P3では柱痕跡が遺存していた。P1の状況から、床面以上の部分を失った後も、柱根部分は遺存したと思われる。柱痕跡からみた柱間は、長軸方向のP1・P3間で260cm、短軸方向のP2・P3間で220cm程度であった。柱穴の配置は、整った長方形であったと思われる。床面からの深さは、P1が66cm、P2が67cm、P3が43cmであった。

床面では、ほかに2基のピットを検出した。P4はP2・P3間で検出した。柱痕跡・埋設土等は遺存しておらず、柱穴の可能性は低い。床面からの深さは27cmであった。P5は北西壁際付近で検出した。覆土は

炭化物を含む黒褐色土であった。入り口に関連した施設の可能性もあるが、床面からの深さが7cm程度と浅く、詳細は明らかにできなかった。

炉跡は、中央から北西に寄った位置に設けられていた。東側がシートパイル控え部分で調査できなかったが、およその平面形は楕円形と思われ、短径60cm程度、炉床面の深さ8cmであった。覆土上層には多量の炭化物が、下層には地山ローム層の底面から剝離した焼土ブロックが、多量に含まれていた。炉床面はロームが焼けて赤化し、ブロック状になっていた。

貯蔵穴は南東壁際で検出した。覆土中から、10の磨石および少量の土器片が出土した。床面からの深さは24cmであった。

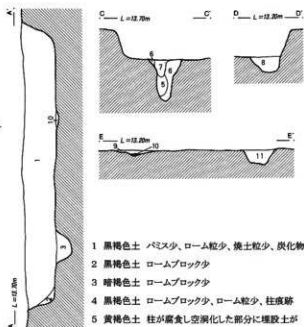
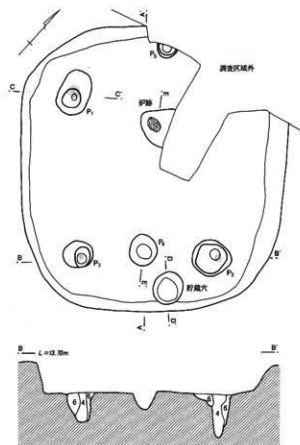
床面は、地山ローム層を利用していた。明確な貼床材は検出できなかった。床表面は、炉跡・P1間を中心に硬化していた。顕著な凹凸があった。

出土遺物は、覆土下層を中心に、竪穴部中央付近から南角寄りの位置で検出した。すべて床面から浮いた状態であった。出土遺物には、壺・台付甕・石製品があった。1の壺はハケ状工具による調整後、全面を磨いている。5の破片は、胴部上半に2〜3段と思われるS字結節文をとまなう斜縄文を施し、円形浮文を付す。甕は2・3・6・7に、ハケ状工具による調整後の板ナデが認められる。口縁端部は面取り調整されたものとされないものの2種がある。口唇部のキサミは、ハケ状工具もしくはヘラ状工具の先端で押圧する方法をとる。10の磨石は、各面を使用しているが、上面には赤色顔料が付着している。

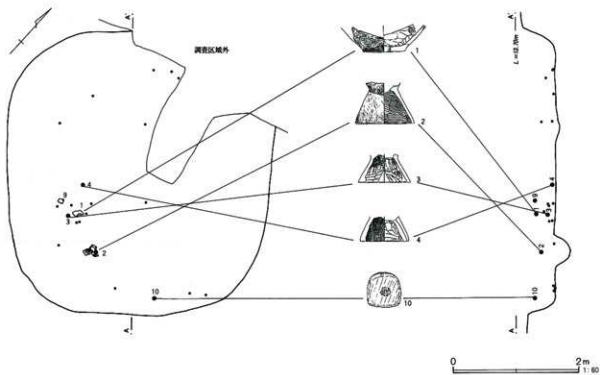
第1号住居跡出土遺物観察表 (第25図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺 底部			(9.4)	ABFGI	A	にぶい橙	40	外:細ハケ後ミガキ(密) 内:粗ハケ後ヘラナデ
2	脚			12.5	ABHI	B	浅黄	100	外:粗ハケ後ナデ 内:粗ハケ
3	脚			(11.1)	ABFGHI	A	にぶい黄橙	20	外:細ハケ後下部ヘラナデ 内:細ハケ後ヘラナデ
4	甕			(10.4)	ABCFGHI	A	にぶい橙	20	外:細ハケ 内:細ハケ後ヘラナデ
5	壺				ABFHI	A	橙		内:板ナデ 裝飾:単一原体横回転単節LR+S字状結節文

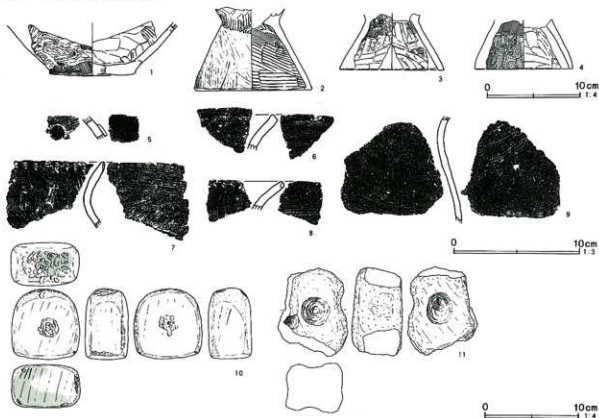
第24図 第1号住居跡および遺物出土状況



- 1 黒褐色土 パズル少、ローム粒少、炭化物少
- 2 黒褐色土 ロームブロック少
- 3 暗褐色土 ロームブロック少
- 4 黒褐色土 ロームブロック少、ローム粒少、柱痕跡
- 5 黄褐色土 柱が腐食し空洞化した部分に埋設土が
崩落した層
- 6 黄褐色土 ロームブロック主体、柱埋設土
- 7 黒褐色土 ロームブロック少
- 8 暗褐色土 ロームブロック少
- 9 暗黄褐色土 炭化物多、焼土ブロック少
- 10 黒褐色土 焼土ブロック多、焼土粒少
- 11 黒褐色土 焼土粒少



第25図 第1号住居跡出土遺物



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
6	甕				ABGHI	A	橙		外;板ナテ 内;粗ハケ後口縁ナテ
7	甕				ABFGHI	A	にょい赤褐		外;粗ハケ後ナテ、口縁ナテ下にハケ残る 内;粗ハケ 裝飾;口唇ハケによるキザミ
8	甕				ABGHI	A	にょい黄褐		外;粗ハケ後口縁ナテ 内;粗ハケ後板ナテ 裝飾;口唇ハケによるキザミ
9	甕				ABFGHI	A	にょい黄褐		外;粗ハケ、風化のためのナテは不明 内;粗ハケ、胴部粗ハケ後ナテ
10	磨石	長7.45cm	幅7.30cm	厚4.56cm	重さ462.68g				安山岩製 上部に赤色顔料付着 敲打痕あり
11	磨石	長9.40cm	幅7.50cm	厚5.10cm	重さ519.84g				閃緑岩製 窪みあり

第2号住居跡 (第26図)

B2グリッドで検出した堅穴住居跡である。北西壁付近が配水管による擾乱で、南東側1/4程度が現代建築物による擾乱で破壊されていた。

平面形は北西-南東方向にやや長いが、ほぼ隅丸方形であった。規模は短軸上で3.30m程度、深さ0.40m、軸方位はN-42°Wであった。

覆土は主に2層からなり、下層は焼土・炭化物を含んでいた。

壁面はほぼ垂直に立ち上っていた。

床面上に検出できた施設は炉跡のみで、柱穴等は擾乱によって破壊されたか、元来設置されていないかた

か確認することができなかった。

炉跡は、中央から北西に寄った位置に設けられていた。平面形は、ほぼ円形で、径48cm程度、炉床面の深さ11cmであった。覆土上層には多量の炭化物が、下層には底面から剝離した焼土ブロックが含まれていた。炉床面はロームが焼けたもので赤化していた。

床面は、地山ローム層を一旦掘り下げ、暗褐色土ブロックとロームブロックの混合土を埋戻して床材としていた。床表面は、炉跡南側や東側を中心に硬化していた。顕著な凹凸があり、一部に光沢が認められた。

出土遺物は、覆土下層・床面上を中心に、少量の土

器片を検出した。1は粗いハケ状工具による調整が顕著な単口縁の壺で、口唇部は面取りされている。2は小形の台付鉢で、炉跡で検出した。脚端部を欠くが、ほぼ完形で、ハケ状工具による調整後に板ナデを施されている。2の台付鉢は、当住居跡廃絶に近い時期の遺物であろう。

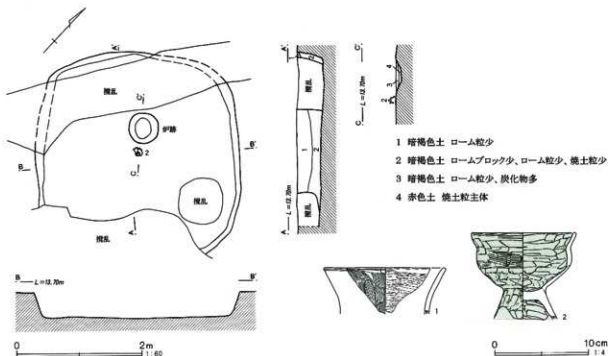
第3号住居跡 (第27～29図)

A1・B1グリッドで検出した堅穴住居跡である。

平面形は北西—南東方向にやや長いが、ほぼ隅丸方形であった。規模は北西—南東軸上で3.60m、北東—南西軸上で3.43m、深さ0.35m、長軸方位はN—39°—Wであった。

覆土は主に2層からなり、下層は焼土粒を含んでいた。また、壁際にはローム粒を含む堆積があった。壁面は傾斜しており、壁面上端が崩落したものと考えられる。

第26図 第2号住居跡および出土遺物



第2号住居跡出土遺物観察表 (第26図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備	考
1	壺	(12.7)			ABPHI	A	にぶい黄褐	10	外; 粗ハケ、口縁ヘラナデ 内; ミガキ、口縁ヘラナデ	
2	台付鉢	15.2	5.8以上		AHI	A	橙	15	外; 粗ハケ後ヘラナデ 内; ヘラナデ(赤彩)	

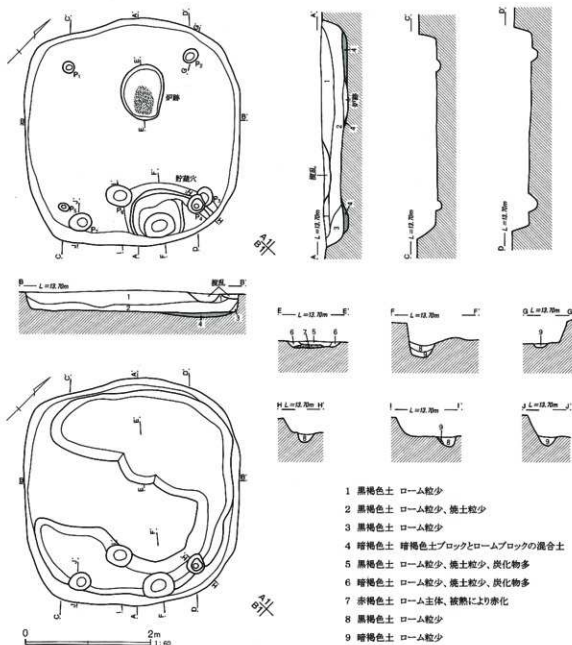
壁溝は確認できなかった。

ピットは7基確認した。柱穴相当位置にあるP1～5では、柱痕跡・埋設土、抜き取り痕等、いずれも確認できなかった。床面からの深さはP1が6cm、P2が8cm、P3が7cm、P4が12cm、P5が6cmと浅く、底面は貼床層内にとまっていた。位置関係では柱穴の可能性は低くないが、柱穴と断定する材料はなかった。P3・4は貯蔵穴の周堤帯上に掘り込まれていた。

P6はP3・P4とP5の間で検出した。床面からの深さは22cmであった。P7はP5跡の南東壁際で検出した。床面からの深さは14cmであった。ともに、柱痕跡・埋設土等は遺存しておらず、緩やかに立ち上る形状等からみても、柱穴の可能性は低い。P7は入り口関連施設の可能性がある。

炉跡は、中央から北西に寄った位置に設けられていた。平面形は不整な楕円形で、長径106cm、短径80cm程

第27図 第3号住居跡および掘り方



度、炉床面の深さ8cmであった。貼床土を一回り大きく掘り込んだ後、ローム土を基層として埋め戻して炉床を築いていた。基礎の掘り込み底面は、中央では、地山を掘り込んでいたが、周囲では、竪穴部基礎の掘り込み底面と同一レベルでとまっていた。覆土は、焼土粒・炭化物を含み、炉床面は中央付近が焼けて赤化し、ブロック状になっていた。

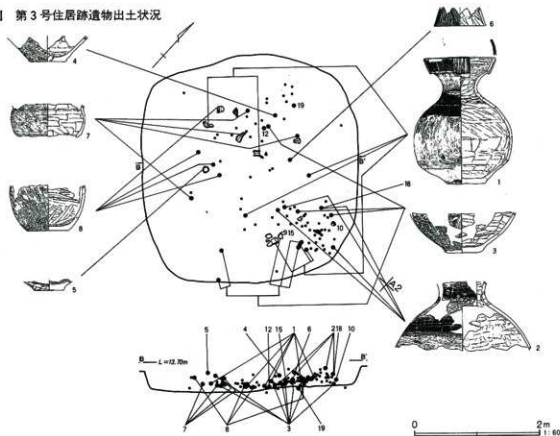
貯蔵穴は南東壁際中央から、やや北に寄った位置で検出した。明瞭な周提帯が設けられていた。平面形は

楕円形で、長径48cm、短径38cm、深さ25cm程度であった。覆土は他のピットと同じであった。

床面は、竪穴部周囲を中心に、地山ローム層を一旦掘り下げ、暗褐色土ブロックとロームブロックの混合土を埋め戻し床材としていた。床表面は、炉跡南側を中心に硬化していた。凹凸が認められた。

出土遺物は、覆土下層を中心に出土した。竪穴部中央寄り北西部と、同南東部に集中する傾向がみられた。垂直分布では、住居跡壁際の自然堆積が進んだ状態で、

第28図 第3号住居跡遺物出土状況



遺物が流入した状況がみられ、本来的に当住居跡の生活段階にともなうと断定できる遺物はなかった。床面上で出土したのは2の壺で、大形の破片である。底面近くで出土し、形状が把握できたのは、1の壺、3の壺底部、7の鉢である。これらの遺物は、ある程度まとまった時間幅の中で当住居跡に廃棄された可能性が高い。

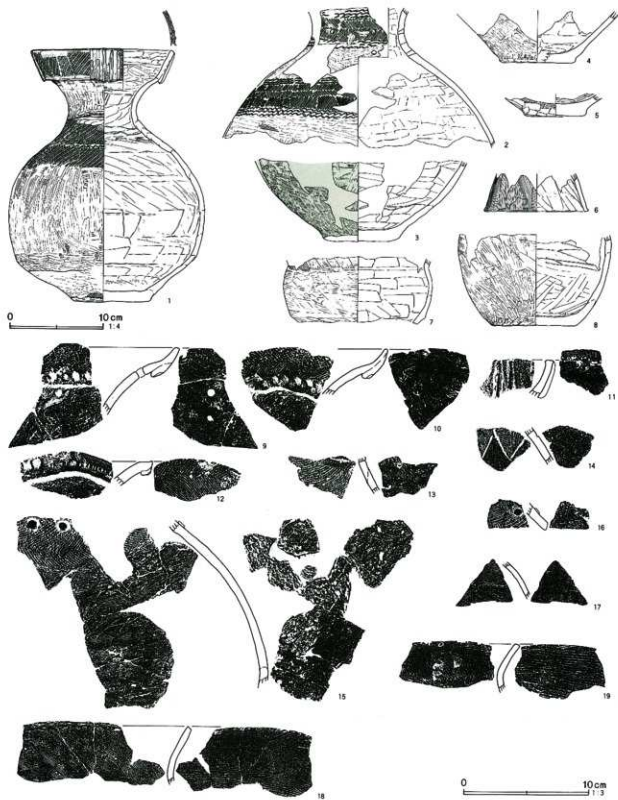
出土遺物には、壺・甕・鉢があった。壺はハケ状工具による調整後磨かれているが、破片では、粗く磨くものが多い。この手法は8の鉢（または壺）にも認められる。1の壺はハケ状工具による調整後、全面を磨いている。胴部下半に屈曲があり、肩部の斜縄文は主に2段に施文されるが、上下の単位間にミガキによ

て磨り消されたS字状結節文が消え残っている。斜縄文は、横位回転の単節LR縄文で、太さの異なる1段と思われるRの縄を撚り合わせたものか、付加糸の可能性もある。撚りの固さ・節の状況からみて、太細撚りであろう。2の壺は、頸部に2帯の文様帯をもつ。斜縄文帯は3段の羽状構成をとり、S字状結節文は3段1単位である。羽状構成をとる斜縄文は、10・12・13・15にも認められる。13は壺頸部片であるが、斜縄文帯上部をハケ状工具の連続押圧による沈線で区画している。14は鋸歯状の沈線区画をもった壺片である。7は台付鉢と思われるが、粗いハケ調整後、板ナでされている。甕は少ないが、口縁端部のハケ状工具による面取りが顕著である。

第3号住居跡出土遺物観察表 (第29図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺				ABFHI	A	浅黄橙	70	外：粗ハケ後ミガキ(密)。内：粗ハケ後ヘナナア。裝飾：複合口縁外面・横回転太細撚りとみられる単節LR、棒状浮文頸部(5本1単位)口縁端部・横回転太細撚りとみられる単節LR。頸部・単一原体の横回転太細撚り単節LR+S字状結節文(RI)2段。S字状結節文はナで消される。縄文帯上部に沈線

第29图 第3号住居跡出土遺物



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
2	壺				ABEFHI	A	浅黄橙	25	外：粗ハケ後ミガキ(全) 内：指ナテ後ヘラナテ 裝飾：頸部・横回転単節RLとLRの羽状2段、上下に3段1単位のS字状結節文(RL) 肩部・横回転単節RLとLRの羽状3段、上下に3段1単位のS字状結節文 頸部に小孔あり
3	壺		8.3		ACFGHI	A	にぶい赤褐	30	外：細ハケ後ミガキ(粗) 内：ヘラナテ
4	壺		(8.1)		AGI	A	褐	40	外：細ハケ後ミガキ(全) 内：粗ハケ後ヘラナテ
5	壺		6.6		ABGHI	C	にぶい黄褐	80	外：細ハケ後ミガキ(密) 内：板ナテ
6	脚		(11.2)		ABGHI	A	にぶい橙	30	外：細ハケ 内：細ハケ後板ナテ
7	台付鉢				AHI	A	にぶい黄褐	25	外：粗ハケ後ナテ(粗) 内：ヘラナテ
8	鉢 or 壺		9.4		ABHI	A	にぶい黄橙	60	外：粗ハケ後ナテ(密) 内：ヘラナテ
9	壺				AFGHI	C	黄橙	外：粗ハケ後板ナテ 内：口縁部ハケ 裝飾：口縁外面・横回転単節RLとLRの羽状2段 口縁下端・キザミ 小孔あり	
10	壺				AFGHI	C	黄橙	外：ハケ後板ナテ 内：口縁部ハケ 裝飾：口縁外面・横回転単節RLとLRの羽状2段 口縁下端・キザミ 9と同一個体	
11	壺				ABFGI	A	にぶい黄褐	内：ミガキ 裝飾：口縁部・横回転単節LR 外面：棟状浮文+横回転単節LR	
12	壺				AGHI	A	黒褐	外：細ハケ後ミガキ(全) 裝飾：口縁部・横回転単節LR、下端にハケによるキザミ 内面：横回転単節LRとRLの羽状2段	
13	壺				AFGHI	A	橙	内：板ナテ 裝飾：頸部・横回転単節LR、上部をハケ連続押注洗滌で区画	
14	壺				ABHI	A	にぶい橙	外：細ハケ後ミガキ(赤彩) 内：板ナテ 裝飾：肩部・横回転単節LR、下部を懸状洗滌で区画	
15	壺				ABFGHI	A	にぶい赤褐	外：細ハケ後ミガキ(粗) 内：板ナテ 裝飾：頸部・横回転単節LRとRLの羽状3段以上、下端にS字状結節文(Lr)2段、円形浮文	
16	壺				AFGHI	A	にぶい橙	内：板ナテ 裝飾：頸部・横回転単節RLとLRの羽状3段以上、円形浮文	
17	壺				AGHI	A	明赤褐色	外：細ハケ後ミガキ(全+赤彩) 内：板ナテ 裝飾：頸部・単一原体による横回転単節RL+S字状結節文(RL) なお円形朱文と思われる部分あり	
18	甕				ABFGHI	A	にぶい赤褐	外：細ハケ 内：細ハケ、口縁ヘラナテ 口縁部：ハケ	
19	甕				ABFGHI	A	黒褐	外：粗ハケ後板ナテ 内：粗ハケ 口縁部：ハケ	

第5号住居跡 (第30-33図)

B1・C1・C2グリッドで検出した竪穴住居跡である。

平面形は北西-南東方向に長い整った隅丸長方形であった。規模は北西-南東軸上で7.75m、北東-南西軸上で5.20m、深さ0.17m、長軸方位はN-35°-Wであった。

覆土は主に2層からなり、下層はロームブロックを含んでいた。層厚5~6cm程度で壁際の堆積と区別できない土壌であることから、ローム層を基材とした床材が、風化のため剝離したものと考えられる。

壁面は下端付近で緩やかに立ち上っていたが、上部は直立していたと考えられる。

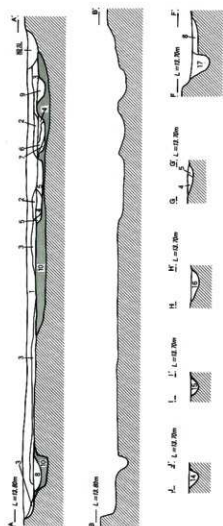
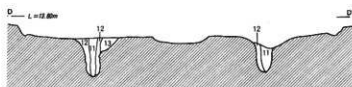
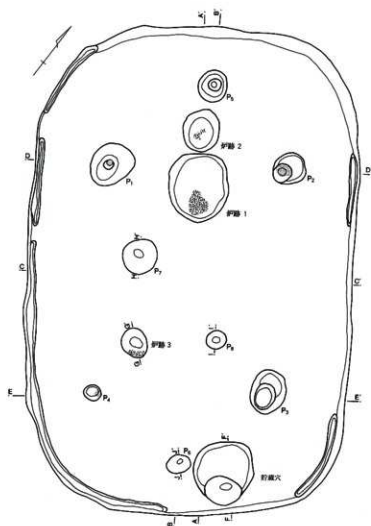
壁溝は、北西から南壁際を中心に確認した。北東側

短辺では検出できなかったが、床面が剝離した可能性を考慮すると全周していたと思われる。

柱痕跡もしくは埋設土の遺る柱穴は、4本確認した。平面では整った長方形に配置されており、柱痕跡間の距離からみた柱間は、短辺のP1・P2間で280cm、長辺のP1・P4間で370cmであった。柱穴覆土は、主に柱材が腐食した有機物・炭化物に起因する黒色土を含む8層と、ロームブロックを含む柱材埋設土である9層で構成されていた。P3では、柱痕跡はなく、埋設土のみが検出されており、柱穴の平面形からみて、抜き取られた可能性もある。

他に4基のピットを確認したが、このうち、P5とP6は、4本の柱穴が構成する長方形配置の短辺中央を結ぶ軸上にあるもので、棟持柱等の柱穴であるかも

第30図 第5号住居跡



- 1 黒褐色土 ローム粒少、焼土粒少
- 2 暗褐色土 焼土ブロック少、焼土粒少
- 3 にぶい黄褐色土 ロームブロック少、ローム粒少
- 4 黒褐色土 焼土ブロック少、焼土粒少、炭化物
- 5 暗褐色土 ロームブロック少
- 6 暗褐色土 焼土ブロック少、焼土粒少
- 7 暗褐色土 ロームブロック少
- 8 黒褐色土 ロームブロック少、ローム粒少
- 9 暗褐色土 ロームブロック少、ローム粒
- 10 にぶい黄褐色土 ロームブロック少、ローム粒少、貼床層
- 11 黒褐色土 ローム粒少、柱痕跡
- 12 黒褐色土 ロームブロック多、柱材埋設土
- 13 黒褐色土 ロームブロック少
- 14 暗褐色土 ロームブロック少
- 15 黒褐色土 ローム粒少
- 16 黒褐色土 暗褐色土ブロック多
- 17 黒褐色土 ローム粒少

0 2m 1:60

知れない。柱痕跡は検出できなかったが、P6 覆土中のロームブロックは、柱材埋設土が遺存したものと考えられる。P5・P6については、入り口関連施設の可能性も考慮する必要がある。

P7はP1・P4間の中央よりで検出した。暗褐色土ブロックを多く含む覆土で埋没していた。P8はP3・P4間の中央よりで検出した。覆土上層に似た土壌で埋没していた。いずれも性格は明瞭でなく、柱穴とする根拠はない。

床面からの深さはP1が59cm、P2が50cm、P3が51cm、P4が58cmで、柱穴では一定していた。P5は12cm、P6は18cm、P7は12cm、P8は12cmであった。P5・P7・P8の底面は、貼床層内にとまっていた。

炉跡は3基確認した。

炉跡1は、P1・P2間の中央寄りで検出した。平面形は楕円形で、長径110cm、短径96cm、炉床面の深さ10cmであった。貼床層を掘り込んだ後、ロームブロックを埋め戻して基層としていた。中央寄りに炭化物・焼土を含む黒褐色土を覆土とする窪みがあり、炉床となっていた。炉床面は貼床層内に作られており、貼床層のロームブロックが被熱によって赤化していた。底面は、基礎の掘り込み、炉床ともに平坦で、立ち上りは急であった。

炉跡2は、炉跡1より壁に寄ったP1・P2間で検出した。平面形は楕円形で、長径66cm、短径57cm、炉床面の深さ12cmであった。構築方法は、炉跡1同様で、貼床層を掘り込んだ後、ロームブロックを埋め戻して基層としていた。中央に炭化物・焼土を含む黒褐色土を覆土とする窪みがあり、中央部が炉床となっていた。炉床面は炉跡基層内に作られており、ロームブロックが被熱によって赤化していた。掘り方は貼床層内にとまっていた。底面は、基礎の掘り込み、炉床部分とも平坦で、立ち上りは急であった。

炉跡3は、P4付近の中央寄りで検出した。平面形は不整な円形で、径50cm前後、炉床面の深さ10cmであった。構築方法は、地山ローム層による床部分を掘り込んだ後、ロームブロックを埋め戻して基層として

いた。P4側に炭化物・焼土を含む黒褐色土を覆土とする窪みがあり、中央部が炉床となっていた。底面は、ロームブロックが被熱によって赤化していた。底面は、基礎の掘り込み、炉床部分ともすり鉢状であった。

貯蔵穴は、P6脇の南東壁際で検出した。平面形は隅丸方形で、中央部の長さ100cm前後、深さ10cm程度であった。底面は平坦であったが、壁際に深さ27cmのビット状の掘り込みがあった。覆土は黒褐色土であった。暗色は有機物由来のものと思われる。ビット状掘り込み部分は、入り口関連施設の可能性がある。

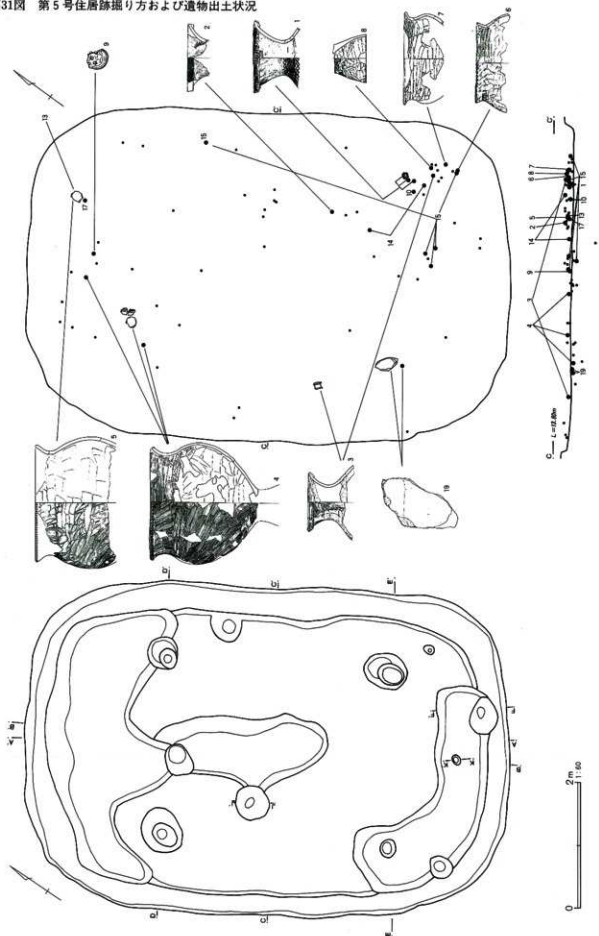
床面は、堅穴部周囲を中心に、地山ローム層を一旦掘り下げ、暗褐色土ブロックとロームブロックの混合土を埋め戻し床材としていた。床表面は、炉跡1周辺の堅穴部中央寄りを中心に硬化していた。顕著な凹凸が認められた。

遺物は、4の甕が床面上に、他は覆土下層から出土した。覆土中のものは床面上5～10cmの位置に分布していた。当住居跡の生活段階にともなうと断定できる遺物はなかったが、北西部床面出土の4の甕は廃絶前後のものと考えられる。また南東部に集中する遺物群も一定の時間幅の中で当住居跡に遺棄・廃棄され、または流入したものと考えてよいだろう。

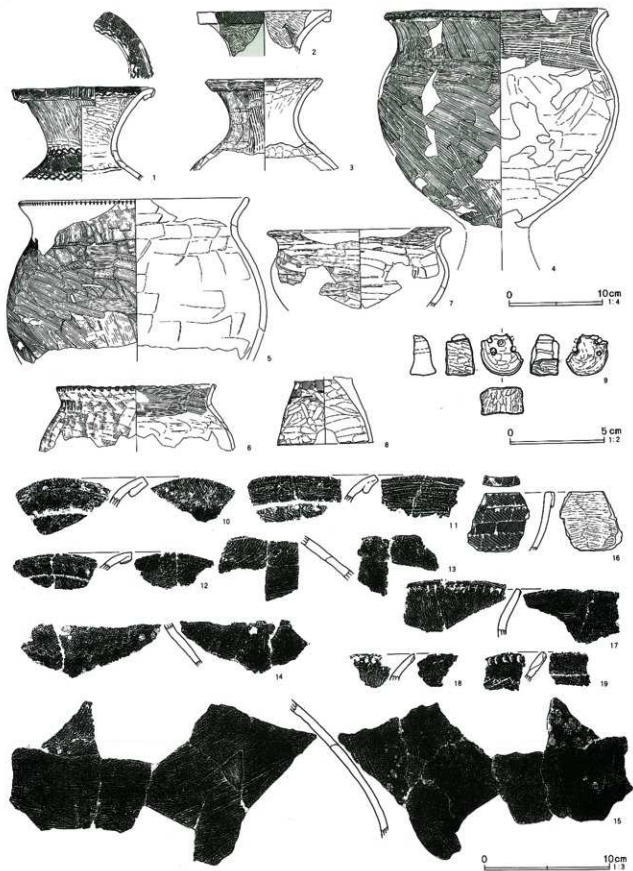
出土遺物には、土器・土製品・石製品があった。壺はすべて折り返し口縁である。器面の仕上げ調整には2種あり、文様帯をもつ壺ではハケ状工具による調整後、ハケメを一部に残して磨かれるが、文様帯をもたないものでは、全面ハケ状工具によるナデで仕上げられるものが多い。1の壺は、頸部および口縁部内面に羽状構成の斜縄文と2段1単位のS字状結節文がめぐる。口縁部内面には円形朱文が施されている。その他の破片でも、口縁部内面に羽状構成の斜縄文がめぐるもの(10)や、頸部斜縄文帯下に2段1単位のS字状結節文をめぐらすもの(14・15)が多い。羽状縄文の多用は16にも共通する。

甕はハケ状工具による仕上げ調整のものが目立つ。ハケ後のナデは、粗く行われるか、極一部に入る程度である。口縁端部はハケ状工具による面取りがなされ、

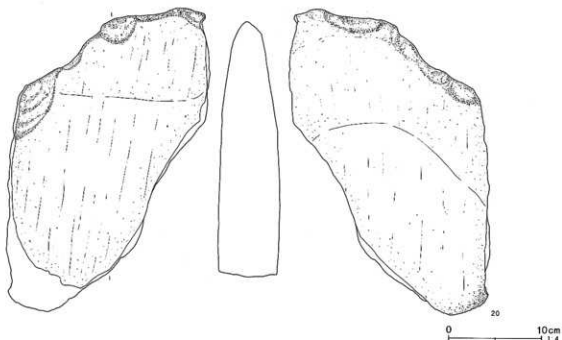
第31図 第5号住居跡掘り方および遺物出土状況



第32図 第5号住居跡出土物(1)



第33図 第5号住居跡出土遺物(2)



口の厚い印象を受ける。口唇部のキザミは、ハケ状工具で押圧した後、ナデつけるように引き出す4・6と、ヘラ状工具で押圧するだけの5との2種がある。5は単独出土の破片である。また、19はカナムグラの押圧による擬縄文が施されている。

7は台付鉢と思われるが、ハケ状工具による調整後、ミガキ的な板ナデが行われている。

9は双角有孔土製品である。1/3程度を欠くが全体によく磨かれている。なお、当住居跡からは、大形の石皿20が出土している。

第5号住居跡出土遺物観察表 (第32・33図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	15.0			ABHI	A	にぶい黄褐	50	外:粗ハケ後ミガキ(密) 内:ミガキ 頸部指ナデ 裝飾;口縁外面・横回転単筋LR(後ハケ)+棒状浮文(4本1単位) 口縁内面・横回転単筋RLとLRの羽状2段、下に2段1単位のS字状結節文(RI)、円形朱文 頸部・横回転単筋RLとLRの羽状2段、上下に2段1単位のS字状結節文(RI)
2	壺	(14.4)			ABGHI	A	にぶい赤褐	15	外:粗ハケ後ミガキ(赤彩・全) 内:ハケ後ミガキ 裝飾;口縁外面・横回転単筋LR
3	壺	(12.6)			ABCHI	B	橙	50	外:粗ハケ後ナデ(粗) 内:粗ハケ後ナデ 頸部指ナデ
4	甕	23.9			AHI	A	にぶい橙	75	外:粗ハケ 内:粗ハケ後胴部以下ヘラナデ 口縁端部;粗ハケ 裝飾;口唇ハケによるキザミ
5	甕	(24.7)			ABFHI	A	黒褐	30	外:細ハケ後ナデ(一部) 内:ヘラナデ 裝飾;口唇ヘラによるキザミ
6	甕	(17.1)			AHI	B	にぶい黄橙	25	外:細ハケ後ナデ(粗) 内:細ハケ後胴部以下ナデ 口縁端部;細ハケ 裝飾;口唇ハケによるキザミ
7	台付鉢?	(19.0)			ABHI	A	明褐	15	外:細ハケ 内:細ハケ後胴部以下ヘラナデ
8	脚			(10.2)	AHI	A	明褐	40	外:細ハケ後ヘラナデ 内:ヘラナデ
9	双角有孔土製品	現存長2.2cm、幅2.3cm、厚さ1.4cm、重さ5.7g			ACI	A	黄橙	75	全面ミガキ 突起刺雕

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
10	壺				ABGHI	A	にふい橙		外：粗ハケ後ミガキ(全・赤彩)、口縁外面のみ板ナデ 内：ミガキ(赤彩) 裝飾：口縁端部・横回転単節LR 口縁内面・横回転単節LRとRLの羽状
11	壺				ABFGHI	A	灰黄褐		外：粗ハケ、口縁外面のみナデ 内：粗ハケ
12	壺				ABFGHI	A	にふい橙		外：粗ハケ 内：粗ハケ、口縁粗ハケ後ナデ 裝飾：口縁下端にハケナデによる連続押印で緩い波状
13	壺				ABFGHI	A	にふい橙		外：粗ハケ後ミガキ(密) 内：板ナデ 裝飾：頸部・横回転単節LR、下部に2段1単位のS字状結節文(RI)
14	壺				ABGI	A	にふい褐		外：ミガキ(密) 内：ハケナデ 裝飾：頸部・横回転単節LR、下部に2段1単位のS字状結節文(RI)
15	壺				ABFHI	A	にふい褐		外：粗ハケ後ミガキ(密) 内：上部ハケ、胴部以下ヘラナデ 裝飾：頸部・横回転単節LR、下部に2段1単位のS字状結節文(RI) 14と同一個体か?
16	高杯or鉢				ABGHI	A	灰黄褐		内：ミガキ 裝飾：口縁外面から体部にかけて横回転単節RLとLRの羽状4段以上、下部に2段以上を単位とするS字状結節文(RI)
17	甕				ABGHI	A	灰黄褐		外：粗ハケ 内：粗ハケ後口縁を除きヘラナデ 口縁端部；粗ハケ 裝飾；口唇ハケによるキザミ
18	甕				AFGHI	A	にふい黄褐		外：粗ハケ 内：粗ハケ後板ナデ 口縁端部；粗ハケ 裝飾；口唇ハケによるキザミ
19	甕				ABFGH	A	にふい橙		外：粗ハケ後口縁板ナデ 内：粗ハケ 口縁端部；ハケ 裝飾；口唇ハケによるキザミ 外面頸部・カナムグラによる縄縄文
20	石皿	長9.40cm	幅7.50cm	厚5.10cm	重さ519.84g				四縁岩製 窪みあり

第6号住居跡(第34図)

C2グリッドで検出した。

六角形に並ぶ7基のピット群として検出したもので、周囲の竪穴住居跡の柱穴配置および軸方位からみて、住居跡と判断した。当住居跡を検出した部分は、上層の擾乱層が厚く、床面以上を削平されたため、竪穴部が失われ、柱穴・貯蔵穴が残ったものと考えられる。覆土は遺存していなかった。

検出したピットは7基である。P5を除くP1～P6は覆土にロームブロックを含んでいた。P3の下層はロームブロックを主とする土壌で埋没しており、上層に黒褐色土が堆積していた。柱痕跡は確認できなかったが、周囲の住居跡における柱穴でロームブロックが埋設土として用いられており、これらについては柱穴と考えてよいと思われる。床面からの深さはP1が16cm、P2が20cm、P3が21cm、P4が27cm、P5は26cm、P6は24cmであった。

第6号住居跡出土遺物観察表(第34図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高杯	10.7	8.5	5.3	ABHI	A	赤	65	外：粗ハケ後ミガキ(全・赤彩) 内：粗ハケ後ミガキ(全・赤彩)

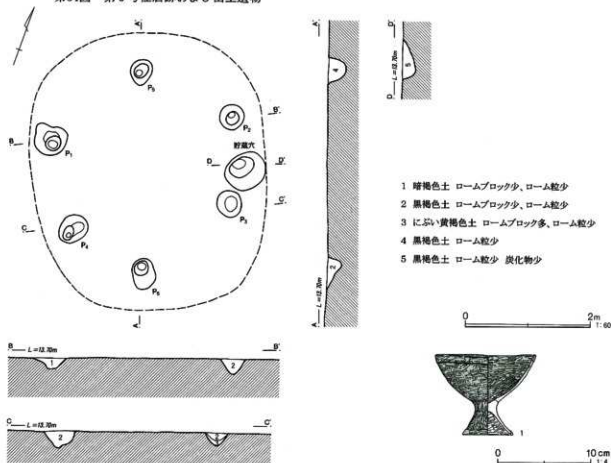
想定できる住居跡の形状は、P5・P6を軸とする平面隅丸長方形で、長軸方位はN-26°-W程度である。規模は、北西-南東軸上で4.50m、北東-南西軸上で3.80m以上と考えられる。この範囲では、第23号土壌と重複関係にあると思われるが、先後関係は確認できなかった。

P2・P3間外側で検出したピットについては、炭化物を含む覆土や形状・位置からみて貯蔵穴と思われる。平面楕円形で、長径67cm、短径55cm、深さ21cmであった。

床面は認められず、掘り方も確認できなかった。炉跡を含めて削平されてしまったのであろう。入り口関連施設等も検出できなかった。

出土遺物は、P6南側の確認面上で高杯1点が出土した。ハケ状工具による調整後、全面に赤色の化粧土を塗り磨いている。口縁および脚端部は折り返している。周囲の住居跡出土の壺に共通する製作方法である。

第34図 第6号住居跡および出土遺物



第7号住居跡 (第35-38図)

D1・D2・E1・E2グリッドで検出した竪穴住居跡である。調査範囲西側限界にあたり、住居跡西半部とシートバイル控え部分が調査できなかった。第27号土壌と重複関係にあり、覆土の平面観察から、第27号土壌が当竪穴住居跡に先行するものと判断した。

平面形は、北西-南東方向に長い整った楕円形であった。規模は北西-南東軸上で9.5m程度、深さ0.20m程度、長軸方位はN-26°-Wであった。

覆土は主に2層からなり、下層は暗褐色土ブロックを含んでいた。床材はローム層を基材としており、剥離とは考えにくい。壁面は、壁溝下端から急傾斜で立ち上っていた。壁溝は、ほぼ全周していた。幅15cm前後、深さ4~8cm程度であった。

柱痕跡もしくは埋設土の遠く柱穴は、2本確認した。平面では長軸線と平行に配置されており、柱痕跡間の距離からみた柱間は520cmであった。柱穴覆土は、柱材腐食後の空洞化部分に流入したと思われる、非常

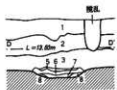
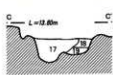
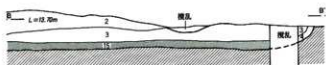
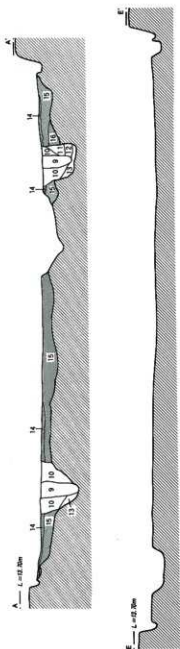
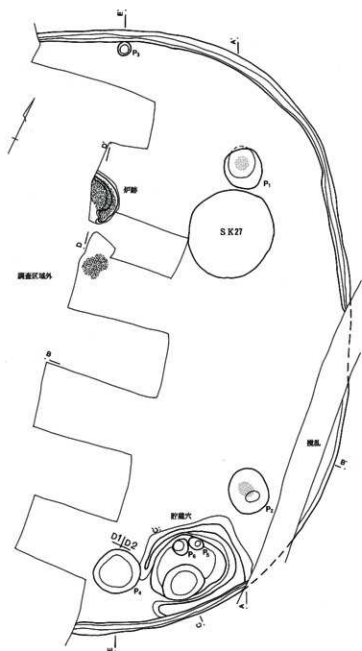
にソフトな暗褐色の9層と、ロームブロックを含む柱材埋設土で構成されていた。P1では、柱穴底面にロームブロックを主材とした根固め層が認められた。床面からの深さは、P1が54cm、P2が62cm、柱痕跡の深さはP1が49cm、P2が62cmであった。

他に4基のピットを確認した。P3とP4では柱痕跡を検出できなかったが、長軸上にのるもので、棟持柱等の柱穴、もしくは入り口関連施設であるかも知れない。第5・6・11号住居跡と共通の配置である。

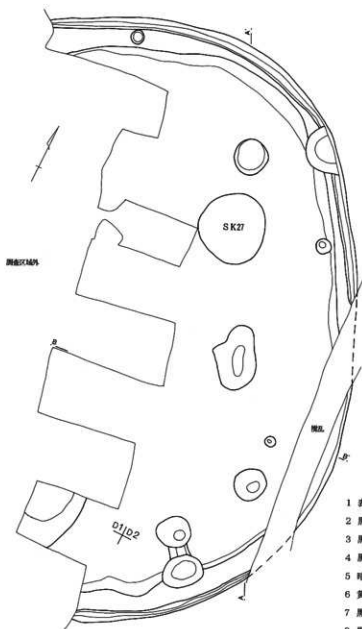
P5・P6は貯蔵穴周堤帯内で検出した。性格は明瞭でなく、柱穴とする根拠はない。同様のピットは、第5・18・19・20号住居跡でも確認した。床面からの深さはP3が25cm、P4が17cm、P5が6cm、P6が8cmであった。

が跡は、中央から北西に寄った位置に設置されていた。貼床層を掘り込んだ後、ロームブロックを埋め戻して基層とし、この上にローム土による炉床、いわゆる「火皿」を設けていた。火皿周囲は周堤帯状の高ま

第35图 第7号住居跡



第36図 第7号住居跡掘り方



- 1 表土
- 2 黒褐色土 ローム粒少
- 3 黒褐色土 ローム粒少、暗褐色土ブロック少
- 4 黒褐色土 暗褐色土ブロック少
- 5 暗褐色土 炭化物、焼土粒少
- 6 黄褐色ローム 火皿、一部が赤褐色に焼けしまる
- 7 黒褐色土 ロームブロック多 赤く焼ける
- 8 黒褐色土 ロームブロック少
- 9 暗褐色土 しまりなし、柱痕跡
- 10 暗褐色土 ロームブロック少、柱埋設土
- 11 暗褐色土 ロームブロック多、柱埋設土
- 12 暗褐色土 ロームブロック少、柱埋設土
- 13 暗褐色土 ロームブロック多、根固め土
- 14 黒褐色土 ロームブロック少、暗褐色土ブロック多、床面硬化層
- 15 黒褐色土 ロームブロック少、暗褐色土ブロック多、貼床層
- 16 黒褐色土 ロームブロック多、暗褐色土ブロック多、貼床層
- 17 黒褐色土 ローム粒少
- 18 黒褐色土 ロームブロック少
- 19 黒褐色土 ローム粒少

0 2m
1:60

りとなっていた。中央に炭化物・焼土を含む暗褐色の覆土があった。掘り方は、底面が平坦で、立ち上りは緩やか、炉床は凹凸があり、立ち上りは急であった。調査範囲限界とシートバイル控えのため、一部の調査となったが、平面形はほぼ円形で、径100cm、炉床面の深さ4cm程度と考えられる。また、近接して焼土だまりを検出した。

貯蔵穴は、P2・P4間の南東壁際で検出した。長辺170cm前後、短辺125cm前後、平面長方形の範囲に周堤帯が設けられており、内部には長径120cm、短径100cm、平面楕円形の掘り込みが認められた。断面観察では覆土に切合いがあり、掘り直されたものと考えられる。床面からの深さは、初めの貯蔵穴で27cm、壁際に寄った掘り直し後の貯蔵穴では37cmであった。覆土の暗色は、いずれも有機質に由来するものと思われる。覆土中からは土器片が出土している。

床面は、壁溝部分以外について、地山ローム層を一旦掘り下げ、暗褐色土ブロックとロームブロックの混合土で埋め戻し床材としていた。床表面は、炉跡周辺を中心に硬化しており、顕著な凹凸が認められた。

遺物は、覆土下層を中心に出土した。生活段階にともなうと判断できるものではなかったが、南東隅の貯蔵穴脇では、複数の土器が床面につぶれた状態で出土した。このうち、図示できたのは7・9・17である。これらについては、住居跡廃絶時に近い埋没前のものと

と判断できる。

出土遺物には、土器・石製品があった。

壺の口縁には、折り返し口縁のものと複合口縁のものがある。器面の仕上げ調整には2種あり、ハケ状工具による調整後、器面を磨くものと、ハケ状工具による調整をもって仕上げとするものである。ミガキを用いる壺は、末端を結節する単一原体による斜縄文+S字状結節文が、羽状構成をとらずに肩部に施される傾向があり、ハケ状工具による調整をもって仕上げとするものは、折り返し口縁内外面に羽状構成の斜縄文帯をもつ傾向がある。18は羽状の斜縄文帯下に糜状文をともなっている。折り返し口縁壺は、折り返し部下面をハケ状工具やヘラ状工具によって連続押圧し、波状にしている(1・14・15)。複合口縁壺口縁部は、上部と下部に粘土帯を付すことで作り出している(12・13)。

甕はハケ状工具による仕上げ調整のものが目立つ。ハケ後のナデは、7の脚部に行われている。口縁端部はハケ状工具による面取りがなされるが、やや薄い印象がある。口唇部のキザミは、ヘラ状工具かハケ状工具でナデをともなわない押圧によって施している。なお、22は外面頸部に羽状構成のハケ状工具によるナデが施されている。なお、9は、接合部の風化のため器形復元が正確でなく、器高が低くなるかも知れない。

11は安山岩を磨いた石製垂飾である。

第7号住居跡出土遺物観察表(第38図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(20.1)			AFHI	A	橙	10	外:粗ハケ 裝飾:口縁下部・板ナデによる連続押圧で波状 口縁内面・横回転車筋LR3段以上、1・2段間をナデ消し後円形浮文
2	壺			(9.2)	AGHI	A	黄橙	25	外:粗ハケ後ミガキ(一部) 内:ヘラナデ底:ヘラナデ
3	壺			(7.0)	AGHI	A	にふい黄褐	25	外:粗ハケ後ミガキ(全) 内:粗ハケ後ミガキ(密)
4	壺			(7.8)	ABFGHI	A	にふい黄橙	20	外:ミガキ(全) 内:ナデ 底:ナデ
5	壺			(9.4)	AGHI	A	灰黄褐	25	外:ハケ後ナデ 内:ヘラナデ
6	甕	(17.2)			AGHI	A	にふい黄褐	10	外:粗ハケ、頸部は後に細ハケ、口縁ナデ内:細ハケ後頸部以下ナデ 裝飾:口唇ハケによるキザミ
7	脚			13.8	ABFHI	A	にふい黄褐	45	外:粗ハケ後ミガキor板ナデ 内:粗ハケ後板ナデ
8	脚				AGHI	A	にふい橙	20	外:細ハケ後ナデ 内:ヘラナデ
9	甕	(23.4)			ABGI	A	にふい黄褐	15	外:粗ハケ 内:粗ハケ後頸部以下ヘラナデ口縁端部:粗ハケ 裝飾:口唇ハケによるキザミ